



ISSN 2185-5196

Annual report in fiscal year 2017

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2017



青葉山遺跡群巡査の様子

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2017

東北大学埋蔵文化財調査室 年次報告2017

目 次

I.	卷頭言	1
II.	東北大学埋蔵文化財調査室の概要	2
1.	東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査	2
2.	埋蔵文化財調査室の組織と施設	5
3.	運営委員会・調査部会	6
III.	2017年度（平成29年度）事業の概要	7
1.	埋蔵文化財調査の概要	7
(1)	川内北地区の調査	8
(2)	川内南地区の調査	8
(3)	青葉山地区の調査	11
(4)	富沢地区の調査	16
2.	遺物整理作業	18
3.	年次報告・調査報告の刊行	18
4.	保存処理事業	18
5.	資料保管状況	19
6.	研究活動	19
(1)	受託研究・共同研究等	19
(2)	学会発表等	24
(3)	科学研究費採択状況	24
7.	教育普及活動	24
(1)	非常勤講師	24
(2)	授業等教育活動への協力	25
(3)	展示活動	25
(4)	講演講師・協力依頼等	25
(5)	保管資料の貸出	26
(6)	外部からの派遣依頼等	26
(7)	その他の広報活動	27
8.	仙台城跡二の丸第18地点6B区出土の木簡（W1）の釈文訂正について	28
《引用・参考文献》		29
IV.	資料	30
1.	国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程	30
2.	東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2017年度）	32
3.	東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2017年度）	32
4.	東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧	33

例　言

1. 本年次報告書は、東北大学埋蔵文化財調査室が2017年度に行った埋蔵文化財調査の概要、その他の事業についてまとめたものである。
2. 本年次報告書の編集・執筆は、菅野智則・柴田恵子・石橋宏・千葉直美が担当した。
3. 「8. 仙台城跡二の丸第18地点6B区出土の木簡（W1）の釈文訂正について」については、柴田恵子が執筆し、東北大学大学院文学研究科准教授籠橋俊光氏にご教示頂いた。
4. 図1・2の背景の元図は、それぞれ、国土地理院発行の、2万5千分の1地形図『仙台西北部』・『仙台西南部』、1万分の1地形図『青葉山』を使用した。
5. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 1 …… 『年報』 1
『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』 2008 …… 『年次報告』 2008
『東北大学埋蔵文化財調査報告』 1 …… 『調査報告』 1

I. 卷頭言

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2017を刊行いたします。本報告では、当室が2017年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、およびその他の事業の概要をとりまとめて報告しています。

2017年度には、とくに大きな発掘調査はありませんでしたが、2016年度から続く長期的な立会調査を実施しています。この立会調査は、仙台城跡二の丸地区である川内南地区において、キャンパス全域に排水設備を巡らすための工事に伴うもので、2017年度は2期目にあたります。今後、近年の集中豪雨などの異常気象や自然災害に対応する工事計画と、それに伴う立会調査の増加が見込まれています。

また、これまでの発掘調査で出土した遺物等を利用して、本学附属図書館・史料館のスペースをお借りした展示活動を始めました。この展示の目的は、本学の教職員・学生のみならず、広く一般の方々に、本学の所在する敷地の歴史的背景を知ってもらうことです。この展示には、多くの人々にお越しいただき、大変良い評価を頂いておりました。より一層、このような当室の収蔵資料の利活用を進めていきたいと考えています。

一方で、2011年の東日本大震災以降に続いた規模の大きな本調査は一段落したものの、新規工事に伴う多くの立会調査のほか、震災以後の調査により出土した膨大な資料の整理作業を含め、従来の業務量は膨大なものとなっています。学内外の関係機関や関係者の多大なご協力やご配慮を頂いて、今のところ円滑に事業を進めることができます。ここに厚くお礼申しあげるとともに、今後もご支援とご協力を宜しくお願ひいたします。

埋蔵文化財調査室長 藤澤 敦

II. 東北大学埋蔵文化財調査室の概要

1. 東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、各キャンパスに加え多くの研究施設があり、これらの構内には多くの埋蔵文化財が存在する（表1、図1）。とくに川内地区は、ほぼ全域が仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図2）。

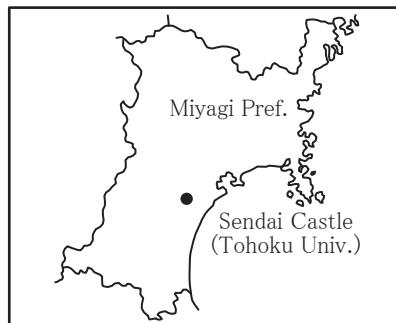
これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を行う場合、文化財保護法により届出が義務づけられている。工事の掘削で遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更により遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、発掘調査を行い、記録を作成することで、次善の策とする記録保存という方法が取られている。また、この記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。また、学内に調査組織を設けることにより、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られるという側面もある。

東北大学においても、施設整備を円滑に行うため、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的として、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が実施してきた。1994年度には、調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置された。2006年度には、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へ改組された。そして、2017年度には学内共同教育研究施設等へ再度改組され、事業を引き継いでいる。

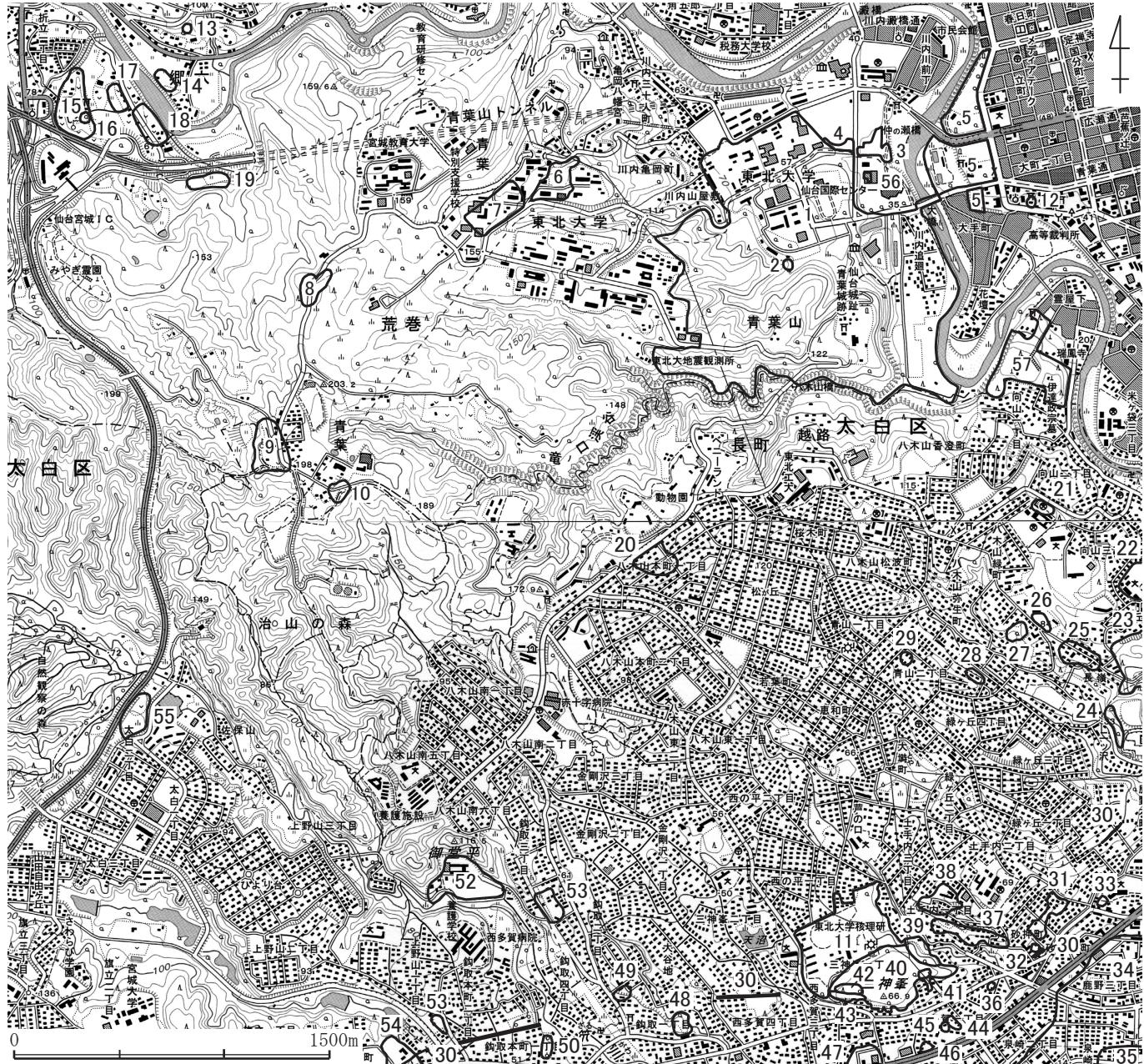
表1 東北大学構内の遺跡

団地名	所在地住所	遺跡名	県遺跡番号	時代	備考
川内1	仙台市青葉区 川内27-1-41他	仙台城跡	01033	近世	二の丸地区・武家屋敷地区・御裏林地区
	仙台市青葉区 川内12-2	川内古碑群	01386	鎌倉	弘安10年（1287）・正安4年（1302）
	仙台市青葉区 川内41	川内B遺跡	01565	縄文・近世	
青葉山2	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山B遺跡	01373	縄文・弥生 古代	
	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山E遺跡	01443	縄文・弥生 古代	
青葉山3	仙台市青葉区 荒巻字青葉468-1	青葉山C遺跡	01442	旧石器	
富沢	仙台市太白区 三神峯一丁目101	芦ノ口遺跡	01315	縄文・弥生 古墳・古代	
川渡	大崎市鳴子温泉 大口字蓬田	上川原遺跡	36006	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	丸森遺跡	36038	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	東北大農場2・3号畑遺跡	36098	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町西	町西遺跡	36106	弥生	
小乗浜	牡鹿郡女川町 小乗浜	小乗浜B遺跡	73021	縄文	宿舎裏の山林部分



Sites in Tohoku University

- 1 : Sendai Castle Ruins
- 2 : Kawauchi steles
- 4 : Kawauchi B Site
- 6 : Aobayama B Site
- 7 : Aobayama E Site
- 8 : Aobayama C Site
- 11 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 川内A遺跡 4 : 川内B遺跡 5 : 桜ヶ岡公園遺跡 6 : 青葉山B遺跡 7 : 青葉山E遺跡 8 : 青葉山C遺跡
- 9 : 青葉山A遺跡 10 : 青葉山D遺跡 11 : 茅ノ口遺跡 12 : 片平仙台大神宮の板碑 13 : 郷六大日如來の碑 14 : 葛岡城跡 15 : 郷六城跡
- 16 : 郷六建武碑 17 : 沼田遺跡 18 : 郷六御殿跡 19 : 郷六遺跡 20 : 松ヶ丘遺跡 21 : 向山高裏遺跡 22 : 萩ヶ丘遺跡 23 : 茂ヶ崎城跡
- 24 : ツツ沢横穴墓群 25 : 萩ヶ岡B遺跡 26 : 八木山緑町遺跡 27 : ツツ沢遺跡 28 : 青山二丁目遺跡 29 : 青山二丁目B遺跡
- 30 : 杉土手(鹿除土手) 31 : 砂押屋敷遺跡 32 : 砂押古墳 33 : 二塚古墳 34 : 富沢遺跡 35 : 泉崎浦遺跡 36 : 金洗沢古墳 37 : 土手内窓跡
- 38 : 土手内遺跡 39 : 土手内横穴墓群 40 : 三神峯遺跡 41 : 金山窓跡 42 : 三神峯古墳群 43 : 富沢窓跡 44 : 裏町東遺跡 45 : 裏町古墳
- 46 : 原東遺跡 47 : 原遺跡 48 : 八幡遺跡 49 : 後田遺跡 50 : 町遺跡 51 : 神瀧山遺跡 52 : 御堂平遺跡 53 : 上野山遺跡 54 : 北前遺跡
- 55 : 佐保山東遺跡 56 : 川内C遺跡 57 : 経ヶ峰伊達家墓所

図1 東北大學と周辺の遺跡

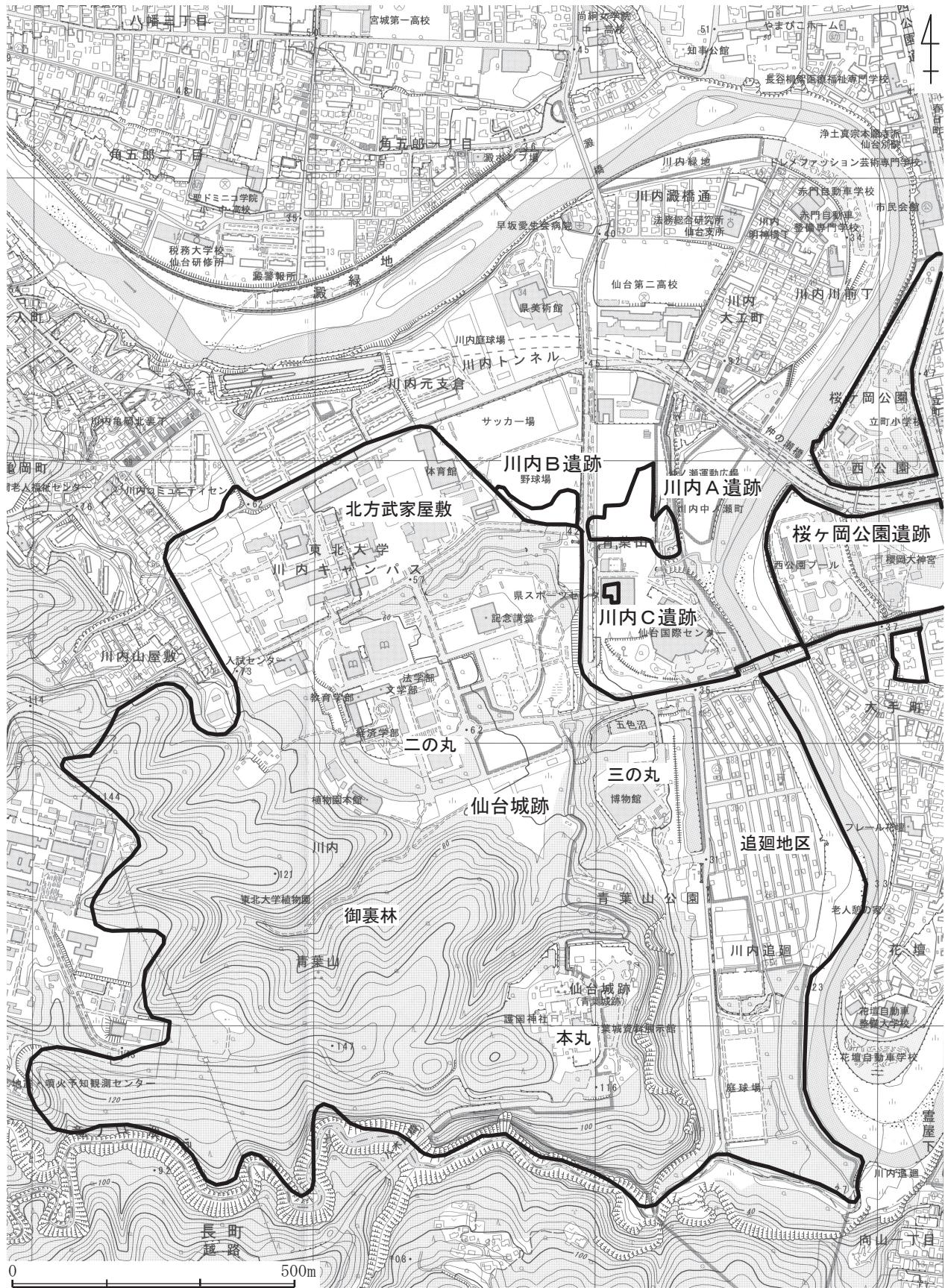


図2 仙台城と二の丸の位置

2. 埋蔵文化財調査室の組織と施設

当室の職員は、併任の調査室長1名、文化財調査員3名（うち特任准教授1名、専門職員2名）、事務補佐員1名（時間雇用職員）、および保存処理を含めた整理作業を担当する作業員4名（時間雇用職員）からなっている（表2）。本年度は規模の大きな発掘調査がなかったが、その様な調査を実施する際には、発掘調査に従事する作業員（時間雇用職員）を雇用している。

当室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員1名の人物費のほか、複写費賃貸借料費等の役務費、自動車維持費、消耗品費、福利厚生費等である。

発掘調査が実施される場合は、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。その中から、作業員賃金や機器類リース費、消耗品費などを支出することになる。

また、発掘調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員4名の賃金も、ここから支弁されている。

当室の主要な業務は、2011年度より片平キャンパス本部棟4（D08）の1階（212m²）にて実施している。その中に、室長室兼事務室、調査員室、作業室、予備室、収蔵庫を設置している。この収蔵庫は、出土遺物の中でも、報告書に図示され、借用や調査依頼の多い資料を保管している。作業室は、実測などの作業をはじめとする整理作業を行う部屋で、報告書などの文献を保管している書架も置いている。予備室は、写真撮影や小規模な打ち合わせなどを行う補助的なスペースとしている。

また、2001年度より木製品・金属製品等の保存処理作業を行う保存処理作業棟（プレハブ平屋建・79m²）が、同じ片平キャンパス内の生命科学研究所本館（D05）の南西側に設置された。その他には、保存資料作業棟北側のガレージの一部（34m²）を使用し、当室の公用自動車を保管しているほか、発掘調査用機材も保管している。2003年度には、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ2階建・202m²）を保存処理作業棟の南側に設置し、報告書掲載以外の遺物等を保管している。今後は、東日本大震災以降において急増した発掘調査の整理作業の進行と共に、これらの遺物の保管場所は手狭になることを予想しており、収蔵遺物の密集化、新たなスペースの確保等、何らかの対策をとる必要がある。

なお、2011年3月11日に発生した東日本大震災では、埋蔵文化財調査室でも被害が生じたが、全般に被害程度は軽微で、早期に復旧することができた。家具類の転倒防止措置や、棚への転落防止ベルト（タナガード）の設置が、被害の軽減に極めて効果的であった。当室では被害が軽微であったこともあり、被災地への文化財レスキュー等へも即座に参加することができた。今後、いつ発生するかわからない震災に備え、より積極的に他の防災策も採用し、当室の所蔵する文化財等を安定的・継続的に保管していきたい。

表2 2017年度埋蔵文化財調査室職員

職名		氏名等	備考
調査室長	総合学術博物館	藤澤 敦	併任
	特任准教授	菅野 智則	
文化財調査員	専門職員	柴田 恵子	
	専門職員	石橋 宏	
事務補佐員	時間雇用職員	佐藤 咲織	埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	4名（通年4名）	全学的基盤経費を財源とした職員

3. 運営委員会・調査部会

東北大学埋蔵文化財調査室では、埋蔵文化財調査室規程第6条に基づき運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、同規定第9条に基づいて運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されている。当調査室は、これらの委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2017年度は、運営委員会を2017年5月17日に実施した。運営委員会の議事内容は、以下の通りである。この運営委員会では、下記のような内容が審議された。

埋蔵文化財調査室運営委員会（2017年5月17日、於：施設部会議室）

審議事項

- (1) 平成28年度埋蔵文化財調査結果及び平成29年度の埋蔵文化財調査計画
- (2) 平成28年度調査室運営費決算及び平成29年度調査室運営費予算
- (3) 平成28年度の整理作業結果及び平成29年度の整理作業計画
- (4) その他

報告事項

- (1) 東日本大震災に係る文化財レスキュー事業について
- (2) 広報活動
- (3) 受託研究
- (4) その他

III. 2017年度（平成29年度）事業の概要

1. 埋蔵文化財調査の概要

2017年度は、確認調査2件、立会調査16件（うち学内措置による立会調査1件）を実施した（表3）。本学敷地内の立会調査に関しては、2009年度途中から、仙台市教育委員会の指示に従い、当室が立会調査を行っている。その他には、仙台市教育委員会から指示を受けた慎重工事3件があった。

川内北地区では、東日本大震災時に対応して応急学生寄宿舎として建設した建物を、引き続き課外活動施設として使用するための整備工事に伴う立会調査2件のほか、厚生会館や川内サブアリーナの食堂の厨房排水を処理する除害施設内部改修工事に伴う立会調査等があった。

川内南地区では、前年度より引き続き、川内南地区雨水排水改修工事に伴う立会調査を行った。この調査は、近年多発している集中豪雨や規模の強い台風等に対応するためのものである。その他には2件の小規模な立会調査があった。

青葉山地区では、屋外環境整備（植栽）工事で、確認調査（AOE2017）を行った。その他、サイクロotron実験棟渡り廊下の庇設置工事に伴う立会調査のほか、1件の小規模な立会調査があった。その他、学内措置の立会調査1件を実施している。

富沢地区でも、基幹・環境整備（電気設備等）工事に伴う確認調査を行った（TM2017）。その他にも4件の立会調査があったが、いずれも小規模な掘削に伴う調査であった。

表3 2017年度調査概要表

調査の種類	地区	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積（m ² ）
確認調査	富沢	富沢団地入口研究棟前（TM2017）	（富沢）基幹・環境整備工事 芦ノ口遺跡	2018/2/5-6	2.56m ²
	青葉山	理学研究科合同C棟前（AOE2017）	（青葉山3他）屋外環境整備（植栽）工事 青葉山E遺跡	2018/3/8-9・12-13	11.25m ²
立会調査	青葉山	サイクロotron実験棟（2016-11）	（青葉山2）サイクロotron実験棟渡廊下庇設置工事	2017/10/16-17	-
	川内南	図書館前・文学部教育研究棟脇・文科系総合研究棟脇・合同研究棟脇・植物園周辺（2016-14）	（川内1）川内南地区雨水排水改修工事	前年度より継続 2017/4/5-8・10-14・17-20・21-24-29・5/8-12・16-19・22-24・26-29-30・6/1・3・5-7・9-10・12・14-17・19-21・23-24・26-30	-
	川内南	植物園研究棟南西側（2017-1）	（川内1）植物園研究棟南西側不凍水栓修繕工事	2017/5/10	-
	川内北	応急学生寄宿舎東側（2017-3）	（川内1）応急学生寄宿舎受変電設備改修工事	2017/7/27・8/7	-
	青葉山	科学研究棟周辺・数学研究棟脇・厚生会館周辺・総合学術博物館周辺（2017-5）	（青葉山2）点字ブロック等設置工事	2017/9/29	-
	川内北	応急学生寄宿舎内部（2017-6）	（川内1）応急学生寄宿舎内部改修その他工事	2017/12/5-6	-
	川内北	フットサル場（2017-7）	（川内1）フットサル場防球ネット改修工事	2017/9/25	-
	川内北	けやき保育園園庭（2017-8）	（川内1）けやき保育園園庭雨水樹改修工事	2017/11/17	-
	川内南	文化系総合講義棟周辺・経済学研究科棟周辺・文化系合同研究棟周辺・厚生会館周辺（2017-9）	（川内1）川内南地区雨水排水改修工事Ⅱ	2017/11/20-22・24-25・27-12/1・11-15・18-19・21-22・25-26・2018/1/9-12・15-19・22-24-26・29-2/2・6-7・13-17・19-23・27-3/3・5-7・10・13-14・16-17	-
	富沢	富沢団地入口研究棟前（2017-10）	（富沢）基幹・環境整備工事	2018/2/5-6	-
	富沢	野球場北側（2017-11）	（富沢）野球場フェンス改修工事	2017/12/18	-
	富沢	野球場北側道路沿い（2017-12）	（富沢）ダストボックス移設工事	2017/12/13	-
	富沢	電子光物理学センター南西（2017-13）	（富沢）電子光物理学センター石碑設置工事	2018/2/1	-
	川内南	入試センター前（2017-14）	（川内1）入試センター前通路アスファルト舗装・手摺設置工事	2017/12/26-27	-
	川内北	厚生会館東側（2017-15）	（川内1）厚生会館除害施設改修工事	2018/2/2	-
学内措置	青葉山	地震変動・地震予知研究センター周辺（2017-4）	（青葉山1）地震変動・地震予知研究センター新営その他工事	2017/8/28	-

(1) 川内北地区の調査

川内北地区では立会調査5件を実施している（図3）。そのほかには、グラウンド周囲人工芝張替工事（2017-18）とグラウンド用具室前防球ネット工事（2017-19）に関しては、慎重工事の指示を受けた。

・応急学生寄宿舎受変電設備改修工事（2017-3）

東日本大震災時に建築基準法の緩和を受けて建設した応急学生寄宿舎を、引き続き本学の施設として使用できるように仙台市と協議し、2016年度末に本設建物として認められ、課外活動施設として用途を変更した。

本立会調査は、課外活動施設へ学内から電気を供給するための工事に伴うものである。当室では、2011年度に本建物建設に伴う工事の立会調査を実施しており、A棟とB棟の中間地点で地表面から60cm下で、時期不明の遺構を確認している（『年次報告』2011）。今回の電気配管等に伴う掘削は、現代の盛土、既存配管や電柱の掘方内に収まり、問題はなかった。

・応急学生寄宿舎内部改修その他工事（2017-6）

本立会調査は、応急学生寄宿舎を課外活動施設として用途を変更するにあたり、不要となった電気温水器用埋設補給水管等の撤去に伴うものである。全て現代の盛土の範囲に収まり、問題はなかった。

・フットサル場防球ネット改修工事（2017-7）

本立会調査は、川内北地区の多目的コート中央の防球ネット張替等に際し、支柱を既存基礎に設置するための基礎の解体・補修工事に伴うものである。その掘削深度は浅く、既存基礎の掘方内に収まり、問題はなかった。

・けやき保育園庭雨水樹改修工事（2017-8）

保育園の雨水排水設備が経年劣化に伴い、降雨時に園庭の浸水及び生活排水系統への雨水の混入等の不具合が発生した。本立会調査は、これらを改善するため既存雨水樹及び雨水配管の撤去、新設の工事に伴うものである。

掘削は既存雨水樹及び配管の掘方の範囲内であり、問題はなかった。

・厚生会館除害施設改修工事（2017-15）

厚生会館とその増築棟、川内サブアリーナの食堂の厨房排水を処理する除害施設（1983年度設置）が経年劣化しており、その内部の改修と、新たにキュービクル型機械室を設置するための基礎工事が必要となった。本立会調査は、機械室設置基礎工事に伴うものである。その掘削深度は浅く、現代の造成土の範囲内に収まり、問題はなかった。

(2) 川内南地区の調査

川内南地区では立会調査4件を実施している（図4）。なお、経済学部駐車場のブロック補修工事（2017-20）は慎重工事の指示を受けた。

・川内南地区雨水排水改修工事（2016-14）

近年の集中豪雨により、植物園裏の青葉山からの雨水が大量に溢れ出し、川内南キャンパス南西部全体が浸水する状況が見受けられた。これは、埋設配管や集水樹等の雨水排水経路が、経年劣化のためのずれや破損、あるいは破損箇所から樹木の根が入り込むことによる詰まり等によるものと考えられた。この問題を解決するため、既存の雨水排水管等を撤去し、新たな雨水排水経路を敷設する4ヶ年の工事計画が策定された。

第I期工事の立会調査は2017年2月8日から開始し、年度末の3月末まで断続的に実施した（『年次報告』2016）。残りのI期工事の立会調査は4月から継続して実施し、6月30日に終了した。植物園津田記念館東側のV7～M8工区（図4）では時期不明の黄色の盛土を確認し、その土層を傷つけないように掘削深度を浅くする等して対応した。附属図書館2号館西側駐車場崖付近のV15～V14工区（図4）では、V14+12.0枠の東側の地山に細長い溝状の土坑が確認され、近世の遺構の可能性があるため、北側に樹を設けて管路を変更した。南側のV13樹周辺（図4）は炭化物を多量に含む黒色シルト質土を確認した。詳細な時期は不明であるが、その土層が近世

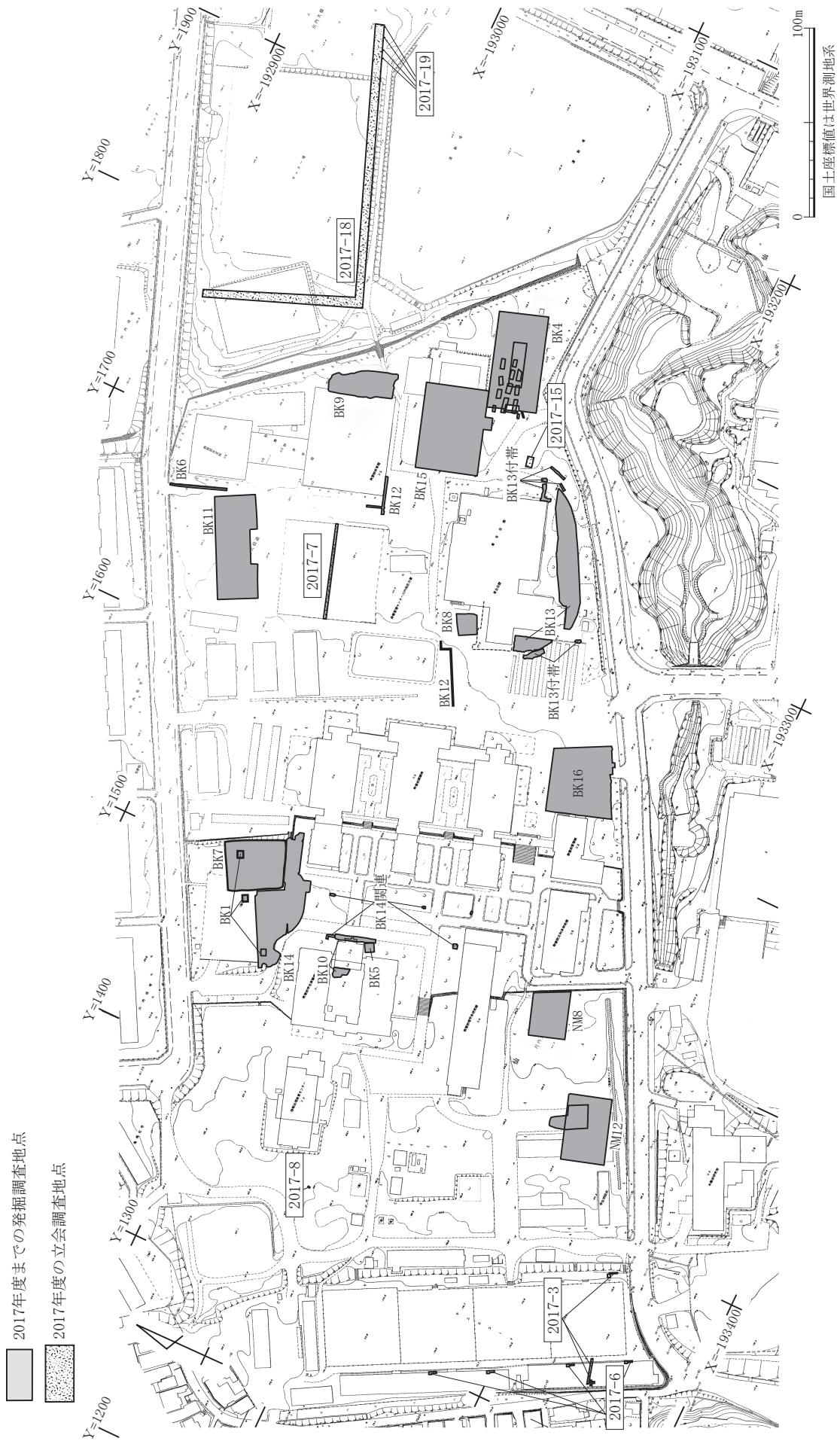


図3 川内北地区調査地点

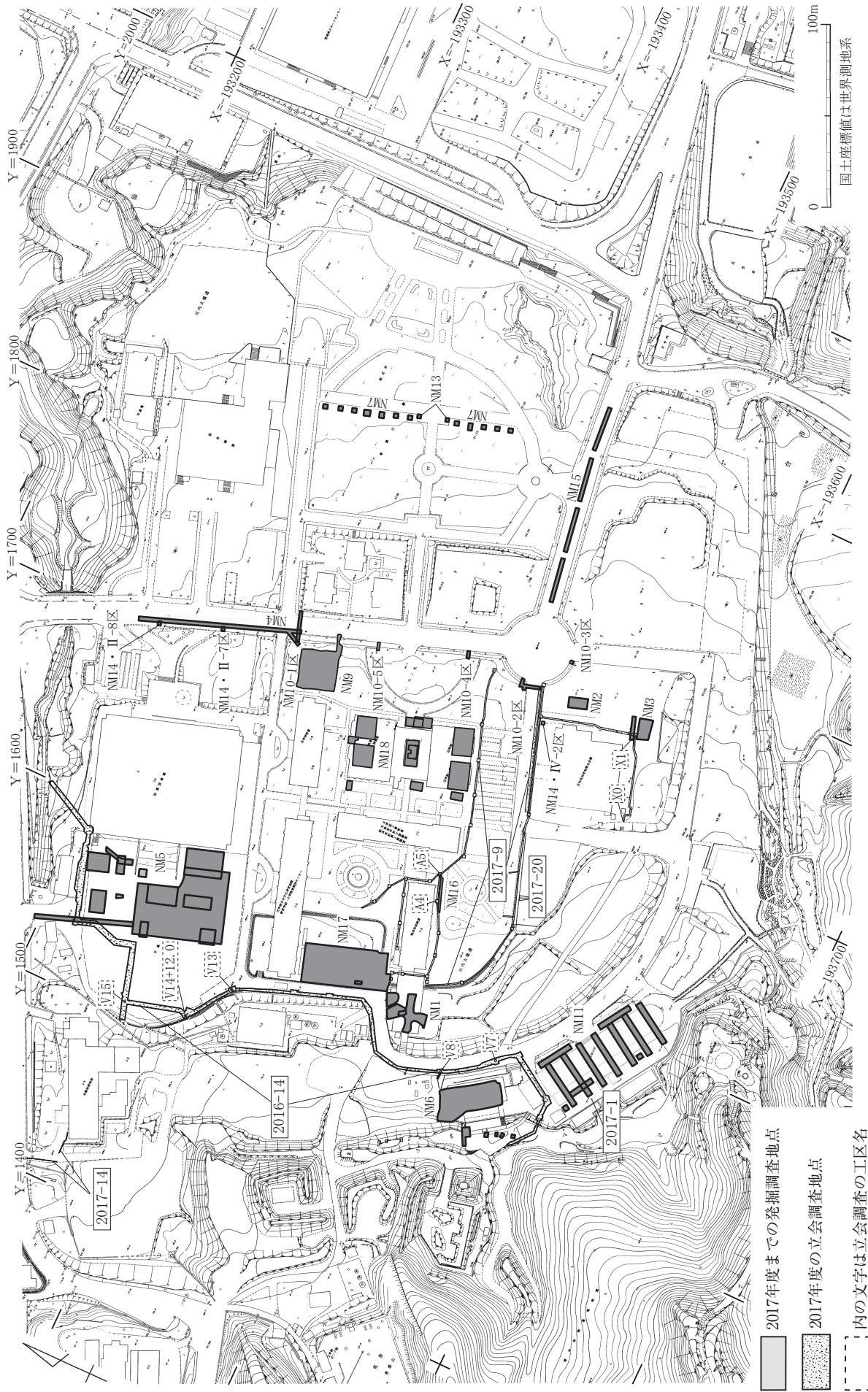


図4 川内南地区調査地点

の遺構面である可能性を考慮し、V13枠は既にレンガ枠造成により掘削された箇所に設定した。管路も遺構の可能性のある黒色シルト質土を傷つけないように掘削深度を浅くするように変更した。それ以外の場所では、近代以降の新しい盛土等の範囲内に収まり問題はなかった。

・植物園研究棟南西側不凍水栓修繕工事（2017-1）

本立会調査は、破損した不凍水栓柱と既存の給水管の一部を撤去し、新しい設備と交換する工事に伴うものである。その掘削深度は浅く、問題はなかった。

・川内南地区雨水排水改修工事Ⅱ（2017-9）

川内南キャンパス南西部の雨水排水経路を敷設する4ヶ年の工事計画のⅡ期工事である。川内南キャンパスは国指定史跡仙台城跡の二の丸地区に該当し、仙台市による『仙台城跡整備基本計画』（仙台市教育委員会生涯学習部文化財課2005）においては、「仙台城跡整備基本構想対象地域」内に位置し、将来的に国指定史跡を目指す第四種保存地区に指定されている地域である。2016年7月15日と2017年9月25日の2回に渡り、当調査室と施設部担当係（建築第一係、建築マネジメント係）が仙台市教育委員会生涯学習部文化財課に赴き、掘削の内容や埋蔵文化財に与える影響等について協議した。その協議を踏まえ、当工事を着工することになった。

2017年度の立会調査は、2017年11月20日から2018年3月17日まで断続的に実施した。先に掘削が大きい枠の位置で試掘調査を行い、既存枠の深さや、搅乱の深い位置を確認して、枠の位置を確定してから管路の掘削を行った。文化系厚生施設南側のX0からX1工区（図4）では、薄い灰層と下部の瓦敷きを確認したため、掘削深度を浅くし、碎石層を薄くして、この層が傷つかないように対応した。A5枠からA4工区（図4）は、南側に隣接する仙台城二の丸第16地点調査区（NM16：『年報』15）で確認した江戸期の整地層である青灰色シルト質土と時期不明の灰白色シルト質土の盛土が確認されたので、北側の既存管の管路と既存枠を利用して、この層を傷つけないように一部管路を北側に変更した。それ以外の場所は既存管の掘方内や、既存建物の造成土内に収まり、問題はなかった。

・入試センター前通路アスファルト舗装・手摺設置工事（2017-14）

本立会調査は、入試センター前入口通路の経年により荒れたアスファルトの再整備、及びバリアフリー対策としての手摺り等を整備する工事に伴うものである。手摺設置に伴う基礎ブロック埋設のための掘削は、全て既存アスファルトを舗装した砂礫層内に収まり、問題はなかった。

（3）青葉山地区の調査

青葉山地区では、確認調査1件、立会調査3件を実施した。うち1件は学内措置による立会調査である（図5）。

a. 屋外環境整備（植栽）工事に伴う確認調査（AOE2017）

・調査経緯と経過

東北大学青葉山3団地・2団地構内にて145本の樹木（桜）植栽に伴う土壤改良、二脚鳥居（添木付）支柱設置、樹木の立込み等を行うための確認調査である。このうち7箇所が、青葉山E遺跡内にあたり、その土壤改良に伴い、1箇所あたり1.2m×1.3m、深さ1mの掘削が必要となった（図6-1）。

この桜7箇所のうち2箇所は、平成27年度に実施した青葉山E遺跡第10次調査（AOE10：『年次報告』2015）の範囲内に当たり、すでに調査済みの地点であることから、全く問題ない。しかし、その他の5箇所（A～E地点：図6-1）については、第10次調査区より北側の未調査区の範囲にあたる。この第10次調査区では、当時の地表面下60cm程で縄文時代の包含層と考える地層に到達した。今回の工事では1mの深度まで掘削することから、縄文時代の遺物包含層に到達する可能性が考えられた。そのため、これらの地点については、事前の確認調査が必要と判断した。

今回の調査では、各地点において安全に掘削するため、やや掘削面積を広げ1.5m×1.5m（2.25m²）の調査区5

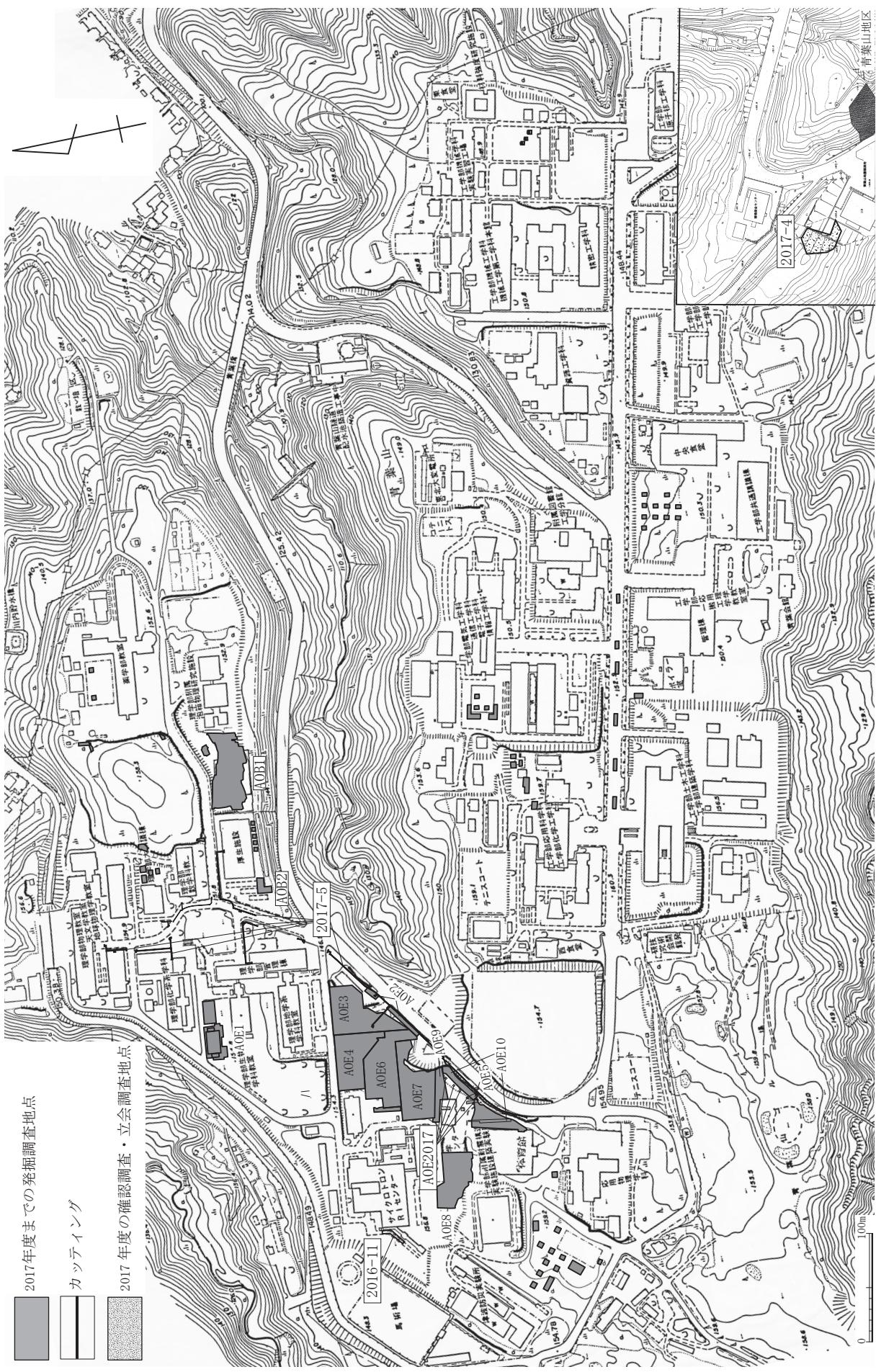


図5 青葉山地区調査地点

箇所（11.25m²）を設定し、重機を用いて表土及び近現代の盛土層を除去した後に、人力で精査し、包含層・遺構等の確認を目的とした。

本調査は、3月8日から重機による表土掘削を開始した。第10次調査の成果から、遺物が多く分布するであろうと予想されたA地点では、現代の盛土が厚いことが判明し、1mを超えて1b層以下の遺物包含層を確認できないため調査を終えた。B～E地点では、遺物包含層を確認できたが、搅乱等も多く、遺構や遺物も確認できなかつた。5箇所の調査区の図面・写真等の記録類を全て作成し、13日には調査を終えた。

・基本層序

基本層序は、青葉山E遺跡第10次調査（AOE10：『年次報告』2015）の層位とほぼ同様である。

盛土 大学等による現代の盛土層。

1層 上部は、近代の盛土層と考えられる土層で1a層とした。下部は、自然堆積の旧表土層と考えられるシルト質の土層で、1b層とした。

2層 繩文時代の遺物包含層と考えられるシルト質の土層である。2a層と2b層に細分した。上部は黒色土、下部は黄色土が主体となる。全体的にしまりが無い柔らかい土質である。今回の調査では、基本的に2b層を全て掘り上げている。

3層 始良Tn火山灰（AT）を含む粘土層である。なお、第10次調査では、3a層と3b層に区分していたが、調査面積も狭く判断が難しいため、今回は分層していない。また、今回の調査は、この3層を面的に検出した時点で終了とした。

4層 上部に川崎スコリアを含む粘土層である。

・調査区ごとの概要

A区：（図7-1）：先述のように、重機にて1m程を掘削したが、1層等は確認できなかつたため、記録を作成した後に調査を終了した。

B区：（図7-1）：重機にて1m程掘削した結果、面的に2a層を確認した。2b層をほぼ掘削した時点で、1m20cm程の深度となつたため、安全性を考え記録を作成した後に調査を終えた。また、南西隅には現代の搅乱による凹みが認められた。遺物等は確認できなかつた。

C区（図6-2・3、図7-2・3・4）：表土より40cm程掘削した時点で、調査区北側に1a層が確認できた。2a層から人力で掘削し、3層をほぼ掘り上げた時点で記録を作成した後に調査を終了した。南側は削平されており、盛土直下に4層が認められた。遺物等は確認できなかつた。

D区（図7-1）：表土60cm程掘削した時点で、調査区北西側にて2b層を部分的に確認した。その部分を掘り下げて、全面的に3層を露出させた。記録を作成した後に調査を終了した。遺物等は確認できなかつた。

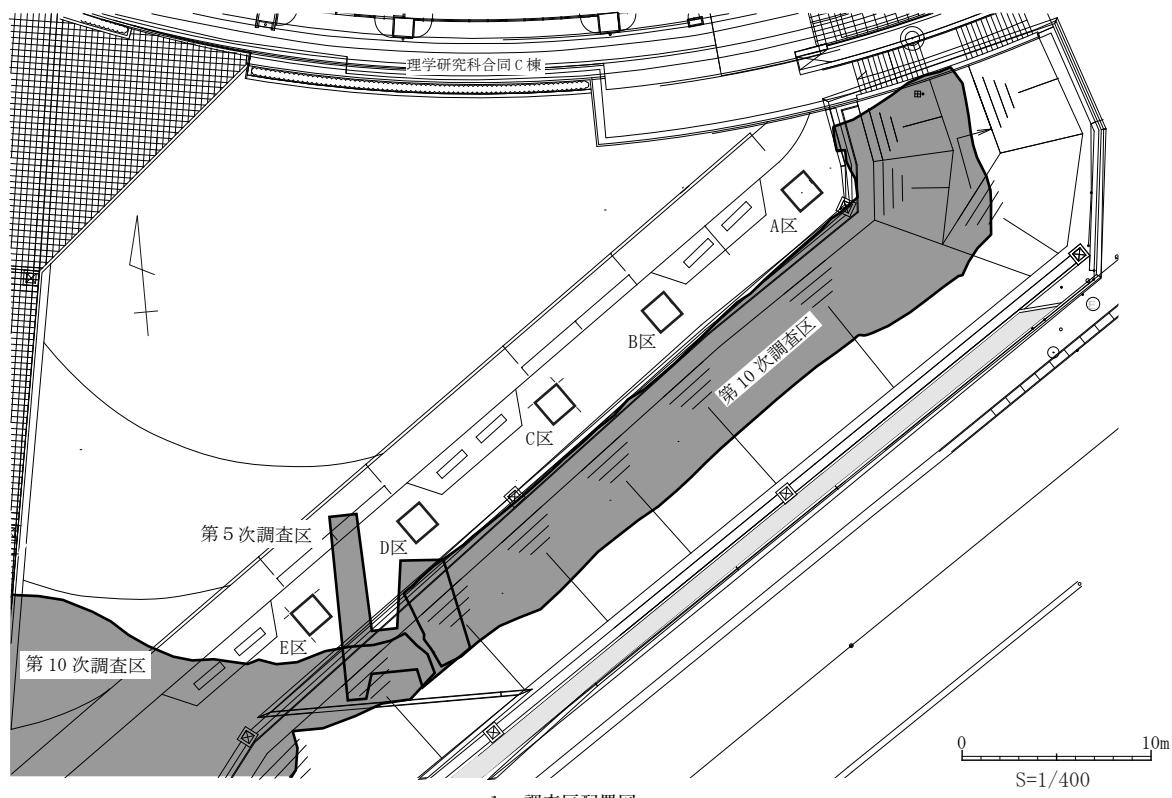
E区（図6-4・5、図7-5・6・7）：表土30cm程掘削した時点で、調査区北側にて1a層を確認した。その後、2a層と2b層を精査し、3層を多少掘り下げた時点で記録を作成した後に調査を終了した。遺物等は確認できなかつた。南側は深く削平された後に盛土がなされている。最深部では、第10次調査でも確認していた愛島軽石層も認められた。

・調査区成果

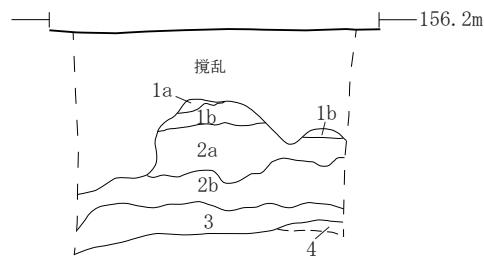
今回の調査では、遺物・遺構等は全く確認できなかつた。東側（A・B区）では盛土がかなり厚いことが確認できた。一方、西側（C～E区）では遺物包含層（2層）が残っていたが、調査区の南側を削平されていることが多く、遺存状態は良好とは言い難い状況であった。また、第10次調査区と同様にC～E区近辺では、遺物が認められないことも確認できた。

b. 立会調査

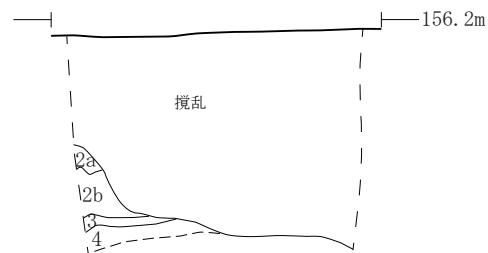
・サイクロトロン実験棟渡廊下庇設置工事（2016-11）



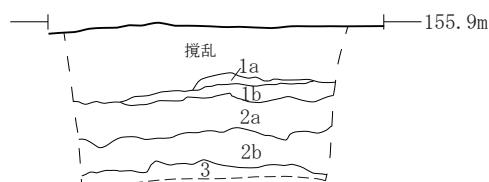
1. 調査区配置図



2. C区北壁土层断面



3. C区東壁土層断面



4. E 区北壁土層斷面



5. E 区西壁土層斷面

旧表土
1a H10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱・しまり弱 炭化物と木根を少量含む
近代の盛土
1b H10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり弱 炭化物と木根を少量含む
基本層
2a H10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり弱 径1-2mm程度の炭化物を少量含む 植物根を少量含む 明褐色 (H10YR5/8) 粘土を斑状に少量含む
2b H10YR5/8 明褐色 粘土 粘性中・しまり弱 径1-2mm程度の炭化物を少量含む 植物根を極少量含む 褐色 (H10YR4/4) 粘土を斑状に少量含む
3 H10YR5/6 明褐色 粘土 粘性強・しまり中 植物根を極少量含む
4 H10YR5/8 明褐色 粘土 粘性強・しまり強 植物根を極少量含む かなり緻密で硬い



図6 青葉山地区確認調査状況1



1. 調査区全景（南西から）



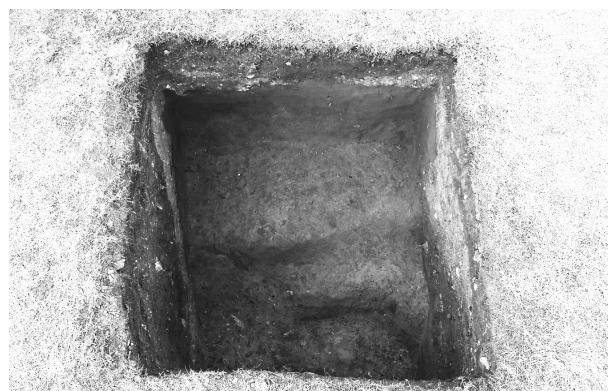
2. C 区全景（南から）



3. C 区北壁土層断面（南から）



4. C 区東壁土層断面（南西から）



5. E 区全景（南から）



6. E 区北壁土層断面（南から）



7. E 区西壁土層断面（北東から）

図 7 青葉山地区確認調査状況 2

サイクロトロン実験棟内の中性子飛行管室へ向かうためには、実験棟の構造と放射線管理上の問題から、一度外に出て、屋外に沿って設置されている渡り廊下を通る必要があるが、屋根等がなく雨天や冬季の降雪時、路面凍結時に滑りやすいため、庇を設置する工事が必要となった。本立会調査は、その庇設置工事に伴うものである。庇の基礎埋設のため70cm程掘削したが、既存建物に伴う造成土の範囲内のみで、特に問題はなかった。

・点字ブロック等設置工事（2017-5）

視覚障害者の安全確保および『障害を理由とする差別解消の推進に関する法律（平成25年法律第65号）』に対応するため、構内歩道部及び仙台市歩道部（地下鉄東西線青葉山駅北1出入り口～理学研究科出入り口）に視覚障害者誘導ブロック・タイルを設置することになった。工事は既存のブロックを外してから、数cm程の掘削で収まるものであり、何の問題もなかった。

・地震変動・地震予知研究センター新宮その他工事（2017-4）

本立会調査は、地震変動・地震予知研究センター新宮棟建設工事において、建物裏手の西側斜面を削ることになった。この地域は、遺跡の範囲外ではあるが、学内措置として、地層確認のための立会調査を実施した。その結果、丘陵斜面に愛島軽石層と下部の段丘礫層を確認し、上部の堆積層はすでに失われていることを確認した。

（4）富沢地区の調査

富沢地区では、確認調査1件、立会調査4件を実施した（図8）。

a. 基幹・環境整備（電気設備等）工事に伴う確認調査（TM2017）

・調査経緯

基幹・環境整備（電気設備等）工事における外灯増設にあたり、その基礎設置のため、芦ノ口遺跡において1.6m四方（2.56m²）、深さ1.4m程の掘削が発生することになった。

この地点は、芦ノ口遺跡第2次調査のAI-7～AF-18区として発掘調査を実施した地点の付近に当たる（TM2：『年報』9）。その際には、表土・近代の盛土から土師質土器破片、石鏃等の遺物も確認されているが、その直下からは地山が露出しており、元々の遺物包含層等は削平されているものと考えられる。基本的には、今回の調査区域も旧地表面などが削平されている範囲内にあるものと想定される。しかし、掘削深度が1.4m程となるため、地山面において何らかの遺構が確認される可能性も考えられることから、発掘調査を実施した。

・調査の概要

外灯基礎部の1.6m四方の2.56m²を調査対象範囲として、2月5日に表土を重機により除去した。深さ20cm程で、地山面が確認された。そのため、この面を精査し、遺構がないことを確認した。その後、写真撮影、図面等の記録を作成して、2月6日に調査を終了した。なお、遺物は出土しなかった。

本調査では、これまでの調査成果と同様に、この地点周辺の旧地表面等は、すでに削平されていることが確認できた。

b. 立会調査

・基幹・環境整備（電気設備等）工事（2017-10）

本立会調査は、外灯増設にあたり、外灯へ既設電柱から電気を供給する配管工事に伴うものである。その掘削深度は30cmから40cmである。基礎部分（TM2017）に近い範囲（図8）は表土下に地山が確認され、遺物包含層は既に削平されていた。電柱に近い範囲は、芦ノ口遺跡第2次調査（TM2：『年報』9）の遺物包含層である暗褐色シルト質土（4層）が認められたが、特に遺物や遺構は確認されず、問題はなかった。

・野球場フェンス改修工事（2017-11）

本立会調査は、野球練習場入口のフェンス改修工事に伴うものである。フェンス基礎改修に伴う掘削は、現代の造成土の範囲内であり、特に問題はなかった。

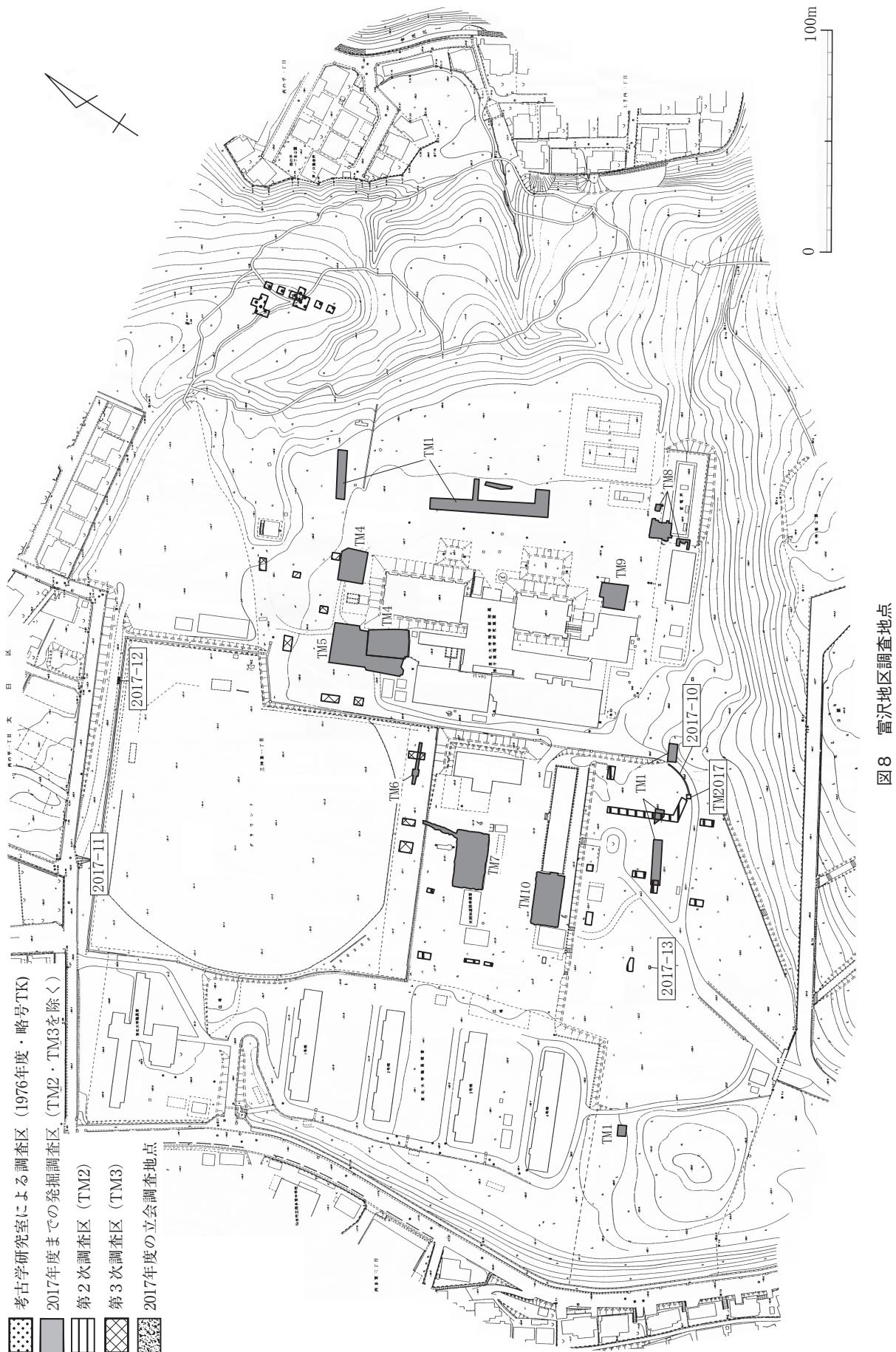


図8 富沢地区調査地点

・ダストボックス移設工事（2017-12）

本立会調査は、現状片平団地に設置されているダストボックスを富沢団地の野球場へ移設する工事に伴うものである。その掘削深度は浅く、現代の造成土の範囲内のため、特に問題はなかった。

・電子光理学センター石碑設置工事（2017-13）

本立会調査は、パルス中性子発生50周年を記念した石碑の設置工事に伴うものである。その掘削深度は浅く、現代の造成土の範囲内のため、特に問題はなかった。

2. 遺物整理作業

(1) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）の整理作業

本調査は、仙台市営地下鉄東西線川内駅前広場整備工事に伴うものである。2011・2012年度、2014・2015年度と、他の調査との兼ね合いによる一時中断をはさんで調査を進めた。この調査では、井戸や建物跡、溝、柱列などの近世の遺構が多数検出され、遺物も近世の陶磁器、土器、瓦、木製品などが平箱79箱分出土している。

2017年度は、発掘調査時の空撮測量図面や手書き遺構図面の整理、遺構写真の整理・編集を行った。出土遺物については、各遺物の種類ごとに接合作業を行い、その後集計を行った。図化遺物を抽出し、実測図作成と資料分析・属性抽出などの作業を行っている。漆塗製品については、水漬け状態での一時保管のため、破片資料についても観察表を作成したのちに集計作業を行った。同じく水漬け状態で一時保管をしている木製品は、分類・集計をし、図化する資料を抽出し、観察表を作成した。図化しない木製品については、保存処理の工程に進んでいる。図化する木製品は実測・写真撮影等、報告書作成の作業が終了してから保存処理を行うため、冷蔵庫での一時保管とした。

(2) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15）の整理作業

本調査は、課外活動施設新営に伴い、2012～2014年度に実施した。本調査では、調査面積が1,503m²と広く、多種多様な近世の遺構が検出されている。それに伴う遺物も、近世の陶磁器、瓦、木製品等が115箱と非常に多く出土している。2017年度は発掘調査時の空撮測量図面や手書き遺構図面の整理等の作業を行っている。遺物については、注記作業のほか、出土遺構・層ごとにまとめ、遺物の種類別に分類を行った。

(3) 青葉山E遺跡第10次調査（AOE10）の整理作業

本調査は、仙台市営地下鉄東西線青葉山駅の屋外環境整備（駅前広場）に伴い2015年度に実施した。調査面積は56.9m²で、遺物は縄文時代中期の土器や石器を中心に、5箱分が出土している。2017年度は、測量図面の整理、調査写真の整理、土器、石器の洗浄や注記等の作業を行っている。

3. 年次報告・調査報告の刊行

2017年度は、『年次報告』1冊を印刷刊行した。そのほか、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2016を印刷刊行した。この『年次報告』2016には、2016年度に調査室が行った各種事業と、本調査2件、立会調査13件の概要を掲載した。

4. 保存処理事業

当室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品等、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この中で、木製品・金属製品については、当室で保存処理を進めている。

木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（『調査年報』16）。一部の大型製品

を除くと、2010年度までの調査で出土した木製品については、保存処理は終了している。2011年度以降、2015年度まで規模の大きな発掘調査が継続しており、木製品も多数出土した。2017年度は、2011～2015年度の調査のうち、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）、第15地点（BK15）については、分類や集計作業が終わり、図化しない抽出外木製品の保存処理作業に取り掛かっている。また、報告書を刊行した仙台城跡二の丸地区第18地点（NM18）、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）については、図化して報告した木製品についての保存処理に順次取り掛かった。

銅製品は、2012年度までの作業によって、2010年度調査以前に出土したものについては、保存処理を終了している。しかし、保存処理体制が整う2000年度以前の調査で出土した銅製品を再確認したところ、未処理のままとなっていた資料が若干確認された。そのため2012年度から計画的にこれらの銅製品の保存処理作業を行っており、2017年度も未処理となっていた銅製品の処理を行った。また、2015年度に報告書の刊行を終えた仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16：『調査報告』5）の調査で出土した銅製品の処理作業を継続している。

鉄製品については、釘をはじめとして大量の遺物が出土しているが、図化して報告した資料以外は、ほとんどが未処理のままである。前年度に引き続き、これら未処理のままとなっていた鉄製品の状況を確認するとともに、保存処理を行っている。また、鉄製品についても、2015年度に報告書を刊行した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16：『調査報告』5）の調査の保存処理作業を継続している。

5. 資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンコーカ社製サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。また2009年度より、収蔵用の箱に木製箱を採用している。油脂製のコンテナは、火災の際に甚大な被害を受けるのに対して、木製箱は耐熱性が高く火災時に燃焼するまでの時間が長いことが明らかとなっている。そのため当室では、整理作業後の収蔵保管にあたっては、油脂製箱から木製箱へ取り替えていくこととし、2009年度から一部は木製箱へ詰め替えを行っている。2017年度は、247箱分について、木製箱に詰め替える作業を行っている。

遺物の全体量を把握するために、容器の種類や大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品等保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、この中には含まれていない。埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表4、図9である。

2017年度の調査によって、新たに増加した箱数はない。また、2017年度は、新たに整理作業が完了した調査もないため、整理報告済みの箱数は2,899箱のままである。未整理のものは277箱、合計の遺物総量は、3,176箱であり、整理・報告済みのものの比率は91.3%である。

6. 研究活動

（1）受託研究・共同研究等

2017年度は、下記の受託研究2件を実施した。

a. 房の沢古墳群出土金属製品の保存処理に関する研究

受託者：岩手県山田町長 佐藤信逸（担当：山田町教育委員会生涯学習課文化係）

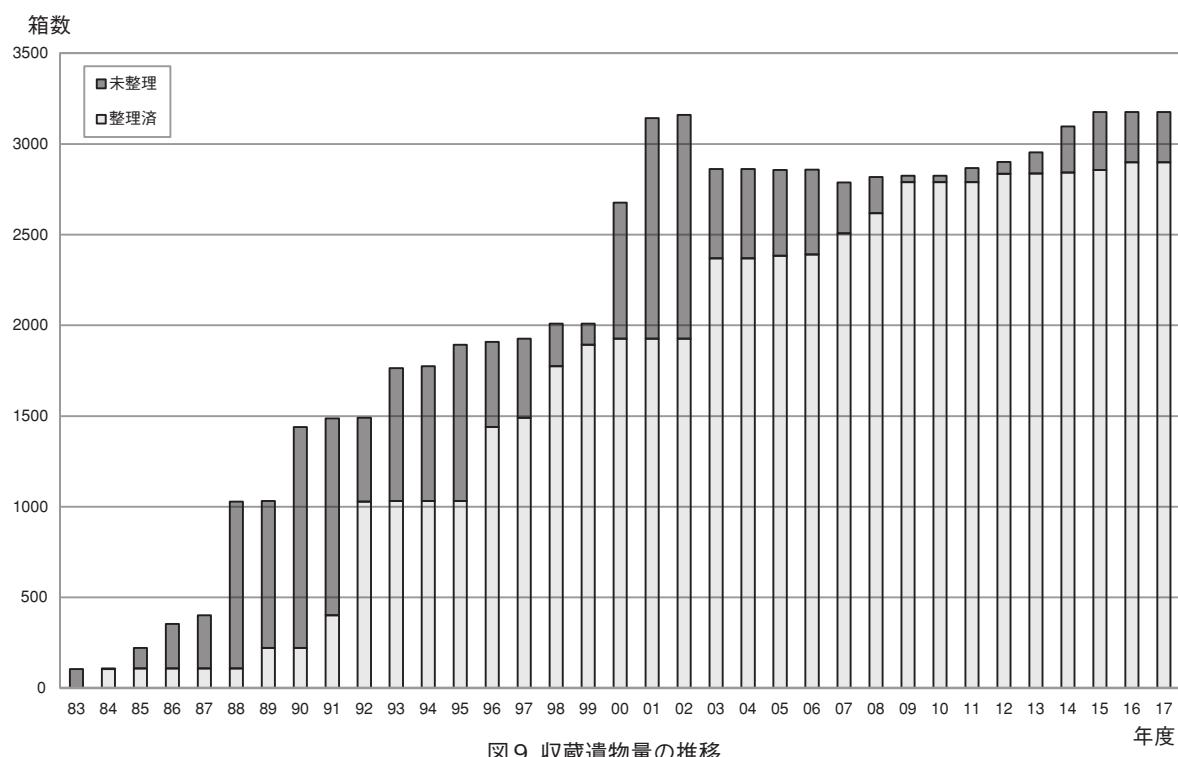
研究課題：房の沢古墳群出土金属製品の保存処理に関する研究

研究目的：岩手県指定文化財房の沢古墳群出土品のうち、脆弱化が進む金属製品を恒久的に保存するため、より効率的な保存処理方法の研究を行う。

対象資料：房の沢古墳群出土金属製品5点

表4 年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

年 度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備 考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1（1983年度調査分）刊行
1985	113	108	221	年報2（1984年度調査分）刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1,028	
1989	811	221	1,032	年報3（1985年度調査分）刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5（1986・87年度調査分）刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6（1988年度調査分）刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7（1989年度調査分）刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8（1990年度調査分）刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10（1991・92年度調査分）刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12（1993・94年度調査分）刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13（1995年度調査分）刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16（1996・97・98年度調査分）刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17（1999年度調査分）刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18（2000年度調査分）刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19-1・20（2001・02年度調査分）刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19-3・21（2001・03年度調査分）刊行
2007	281	2,507	2,788	年報19-4・22（2001・04年度調査分）刊行
2008	198	2,619	2,817	年報19-2・23（2001・05年度調査分）刊行
2009	34	2,790	2,824	年報19-5・24（2001・06年度調査分）刊行 地下鉄補償関係調査整理作業終了
2010	34	2,790	2,824	
2011	78	2,790	2,868	調査報告1（武家屋敷地区第11・12地点）刊行
2012	65	2,836	2,901	調査報告2（武家屋敷地区第13地点）刊行
2013	116	2,838	2,954	調査報告3（芦ノ口遺跡第7・8次調査）刊行
2014	254	2,843	3,097	調査報告4（青葉山E遺跡第9次調査・芦ノ口遺跡第9次調査）刊行
2015	319	2,857	3,176	調査報告5（武家屋敷地区第16地点）刊行
2016	277	2,899	3,176	調査報告6（仙台城跡二の丸地区第18地点）刊行
2017	277	2,899	3,176	



RT01古墳出土引手（45）・鉄鏸（42-2）、RT08古墳出土刀子（122）、RT10古墳出土銜（138）

RT14古墳出土刀子（162）（括弧内の番号は、報告書（大道ほか1998）の掲載番号）

研究期間：2017年5月1日～2018年3月23日

研究経費：2,160,000円

実施体制：研究担当者として当室の菅野智則、藤澤敦、柴田恵子、石橋宏、千葉直美、のほか、松井敏也（筑波大学大学院人間総合科学研究科）の指導を得ている。

その他：2018年10月26日に実験データを元に資料検討会を実施した。参加者は、菅野智則、藤澤敦、千葉直美、松井敏也、川向聖子（山田町教育委員会）の5名である。

研究内容：

1. 保存処理方法構築のためのモニタリングテスト

これまでの研究成果や資料の観察から、再々保存処理が必要となった亀裂の多い資料に対して、スチーム処理と、熱対流を利用した純水浸漬法（熱対流脱塩法）の併用が効率のよい脱塩処理方法であることは確認できたものの、処理期間の短縮には至らなかった。純水浸漬法は、資料を純水に何回も繰り返し浸漬することで脱塩を図る方法であるが、処理期間短縮のためには、1回の浸漬水量を増やすか、1回の浸漬期間を短くする必要があるものと推察する。2016年度の処理では、1回の脱塩処理で資料重量の約10倍の量の純水に3日間浸漬していたが、浸漬水量を20倍や30倍、あるいは、1回の浸漬期間を1日間、2日間にすれば処理期間の短縮が図れる可能性がある。そこで、1回の脱塩処理の浸漬水量および浸漬期間の違いにより、脱塩効率に差が見られるのか確認するため、鋸びさせた鉄板などを用いて、モニタリングテストを行った。

その結果、脱塩処理の処理条件として、1回の浸漬水量は資料重量の30倍、1回の浸漬期間は1日とすることにより、脱塩処理期間の短縮を図れる可能性が高いことが判明した。このモニタリングテストの成果を踏まえ、今回の脱塩処理は、30℃のスチーム処理と30℃の熱対流を利用した純水浸漬法（熱対流脱塩法）の併用で実施するが、純水浸漬時における1回の浸漬水量は資料重量の30倍とし、1回の浸漬期間は1日として実施した。

2. 金属製品保存処理

①現状調査

処理に先立ち、再処理時の接合箇所および樹脂充填箇所の位置、有機質等の付着物等の種類や位置・特徴などを再確認するとともに、新たに発生した腐食生成物（さび）の位置を確認し、処理前資料写真を撮影した。

②再クリーニング

今回の再々処理は、脱塩処理工程で30℃の加温処理を行うため、加温によるエポキシ系合成樹脂の軟化が懸念されたため、なるべく接合箇所や樹脂充填箇所を解除する方針で行うこととした。実体顕微鏡下にてデザインカッターやグラインダー等を用いて樹脂の除去および新たに発生した腐食生成物（さび）の除去を行った。また、補色絵の具についても処理過程での溶解が避けられないため、有機溶剤（アセトン）等を用いて除去した。仕上げにエアブラシ（アルミナの粉を圧縮空気で噴射）をかけ、デザインカッターやグラインダーでは除去しきれない腐食生成物（さび）の除去を行った。

③脱脂処理

次工程の脱塩処理を効果的に実施するためには、資料のコーティングの役割もしている前回処理時の合成樹脂を除去（脱脂）する必要がある。前工程で接合箇所や樹脂充填箇所を解除したことから、強度的に弱い部分が出てきた。通常、合成樹脂を除去するためには有機溶剤のアセトンを用いるが、アセトンは強力な溶剤であるため、前回の含浸樹脂により強化されて形状を保っている部分も解除され、資料がより脆弱な状態となり崩壊する恐れもあった。そこで、今回の処理では有機溶剤でもアセトンより脱脂効果が緩やかなソルベントナフサを用いることとし、資料をソルベントナフサに浸漬して脱脂を行った。

④脱塩処理－スチーム処理および熱対流脱塩法併用－

・スチーム処理

今回新たに発生した腐食生成物（さび）は資料の亀裂部分に多いことから、脱塩処理の際、資料を純水に浸漬しても、表面張力により亀裂の奥までは純水が入り込みにくいと思われた。そこで、スチームクリーナー（株）パレット 修復作業用プリザベーション・ペンシルセット）に純水を入れ、30℃のスチームを資料にまんべんなく当ることにより、スチームの微細な水で、資料の亀裂の奥に発生した新たなさびの要因のひとつである陰イオン（塩素イオン等）を洗い流した。

・純水（BTA 添加）30℃加温オンオフ浸漬（熱対流脱塩法）

ステンレス容器に、資料表面にキレートの膜をつくり脱塩処理中の沈着さびの発生を抑えるための防錆剤（純水量の0.5wt%量のベンゾトリアゾール（BTA）を2倍の容量のエチルアルコールに溶解させたもの）を添加した純水（資料重量の30倍量）を入れ、資料を浸漬した。

熱対流を起こすためには下部方向からの加温が必要であるが、機器等の都合により、資料を入れた容器内の側面下部に水中ヒーター（A：NEO IC オート100）をセットして加温するもの、資料を入れた容器をホットプレート（B：AZ ONE NEO HOTPLATE HI-1000）上にセットして加温するものという2パターンの組み合わせとした。加温温度は30℃に設定し、3時間ごとに加温のオンオフを繰り返し、浸漬水に熱対流が起こるようにした。1日間の浸漬後、脱塩量を確認するため、浸漬水の導電率を測定した。

なお、初回に浸漬水の硫酸イオン濃度を測定したが、すべての資料において低い濃度を示したため、以降の硫酸イオン濃度の測定は行わなかった。また、塩素イオン濃度の測定は今回行わなかった。浸漬水の導電率の測定結果によって純水の漬け換えを繰り返し、浸漬水の導電率が低く一定となった（概ね $20\mu\text{S}/\text{cm}$ 以下を目安とした）ことを確認して脱塩終了とした。

⑤脱水処理

次工程の合成樹脂含浸の前に、資料中に含まれる水分を完全に除去することが必要である。残留水分はさびを誘発するため、水分の除去は特に重要となる。資料内の水分を揮発性の高いエチルアルコールに置換するためエチルアルコールに資料を浸漬した。完全なる置換を図るため、再度新たなエチルアルコールに資料を浸漬した。乾燥後、脱塩処理中に資料表面に沈着したさびにエアブラシをかけて除去し、エアブラシ使用で付着したアルミナの粉を除去するため、資料をエチルアルコールで洗浄した。洗浄後、資料を十分に乾燥させた。

⑥合成樹脂含浸

資料の強化および外気との遮断のため、アクリル系合成樹脂（パラロイドNAD10）を資料に含浸した。パラロイドNAD10・ソルベントナフサ20%溶液に資料を浸漬し、減圧含浸したのち常圧含浸した。合成樹脂のコーティング効果を高めるため、乾燥後、再度同様の樹脂含浸を行った。

⑦接合・修復・補色

脱落した破片をエポキシ系接着剤（アラルダイトラピッド）を用いて接合した。欠損部に関しては強度を保つ上での必要最小部分のみをエポキシ系接着剤で充填した。また、大きく広がった亀裂部分等に関しても強度的に問題がある場合のみエポキシ系接着剤に增量剤（マイクロバルーン）を混合したもので充填した。必要に応じ、接合・充填・復元箇所を違和感がない程度に補色した。

3. 報告書作成

処理後の資料写真を撮影し、作業過程および結果をとりまとめた報告書を作成し、山田町に提出した。なお、それぞれの資料の状態や処理工程については資料ごとの報告書を作成し末尾に添付した。

b. 長崎Ⅱ遺跡出土金属製品の保存処理に関する研究

受託者：岩手県山田町長 佐藤信逸（担当：山田町教育委員会生涯学習課文化係）

研究課題：長崎Ⅱ遺跡出土金属製品の保存処理に関する研究

研究目的：長崎Ⅱ遺跡出土金属製品を資料として効率的な金属製品の保存処理方法について研究する。

対象資料：長崎Ⅱ遺跡出土金属製品2点 刀子（1点）、棒状金属製品（1点）

研究期間：2017年11月17日～2018年3月30日

研究経費：550,000円

実施体制：研究担当者の菅野智則、柴田恵子、石橋宏、千葉直美のほか、松井敏也（筑波大学大学院人間総合科学研究科）の指導を得た。

研究内容：

1. 保存処理方法構築のためのモニタリング調査

2017年度の房の沢古墳群出土資料の再々保存処理のために構築した脱塩方法を、新規の保存処理となる本資料に適用した場合、どのようなデータが得られるのか確認することにした。

その際、詳細な脱塩状況を確認するのに不可欠な、浸漬水の塩素イオン濃度や硫酸イオン濃度の測定を実施するため、浸漬水に添加する防錆剤について見直すこととした。防錆剤には、これまでベンゾトリアゾール（BTA）を使用してきた。BTAはもともと銅に効果を発揮する防錆剤で、房の沢古墳群出土資料には銅製金具などの付属品があるものもあり、それに対応する形で防錆剤としてBTAを使ってきた。しかし、BTAは鉄への防錆剤の効果がやや弱いこと、また、浸漬水の陰イオン分析や濃度測定の障壁となる場合がある。

そこで、従来使用してきた防錆剤BTAと、新たな防錆剤サンヒビターOMA-10・サンヒビターNO.50・トレハロースについて、その防錆性、および脱塩状況確認のための浸漬水の導電率・陰イオン濃度測定の可否に関するモニタリングテストを実施した。

その結果、今回の保存処理では、脱塩処理の際の資料を浸漬する純水に、防錆剤としてサンヒビターNO.50 0.5%を添加することとした。なお、今後のデータ蓄積のため、浸漬水の塩素イオン検知管による塩素イオン濃度測定および硫酸イオン測定器による硫酸イオン濃度測定を実施する際に、導電率および塩素イオン計による塩素イオン濃度の測定も合わせて実施することとした。

2. 金属製品保存処理

①洗浄

搬入前、資料に付着していた土や砂などを洗浄し、洗浄後は資料をエチルアルコールに浸漬して脱水し、乾燥させた。

②現状調査

処理に先立ち、実体顕微鏡下で有機質等の付着物の有無や腐食生成物（さび）の位置や種類等を確認し、図示や写真撮影による記録を行った。

③クリーニング

まずは、ニッパー等で大きなさびこぶ等を切除し、その後、実体顕微鏡下にてデザインカッターやグラインダー等を用いて腐食生成物（さび）の除去を行った。仕上げにエアブラシ（アルミナの粉を圧縮空気で噴射）をかけ、デザインカッターやグラインダーでは除去しきれない腐食生成物（さび）の除去を行った。

④脱脂処理

資料に付着している油分や、前工程のエアブラシ使用で付着したアルミナの粉を除去するために、資料をアセトンに浸漬して脱脂を行った。

⑤脱塩処理 - スチーム処理および熱対流脱塩法併用 -

・スチーム処理

スチームクリーナー（株）パレット 修復作業用プリザベーション・ペンシルセット）に純水を入れ、30℃のス

チームを資料にまんべんなく当てるにより、スチームの微細な水で、資料表面や亀裂の奥に存在するさびの要因のひとつである陰イオン（塩素イオン等）を洗い流した。

・純水（サンヒビターNO.50添加）30℃加温オノフ浸漬（熱対流脱塩法）

ポリプロピレン製容器に、沈着さびの発生を抑えるための防錆剤サンヒビターNO.50（アミン系非イオン界面活性剤、三洋化成工業㈱）0.5%を添加した純水（資料重量の30倍量）を入れ、資料を浸漬した。その容器を30℃に設定したホットプレート（AZ ONE NEO HOTPLATEHI-1000）上にセットし、3時間ごとに加温のオノフを繰り返して浸漬水に熱対流が起こるようにした。1日間の浸漬後、脱塩状況を確認するため、浸漬水の導電率と塩素イオン濃度と硫酸イオン濃度を測定した。なお、硫酸イオン濃度については、初回の測定で両資料において低い濃度を示したため、以降の測定は行わなかった。従って、浸漬水の塩素イオン濃度の測定結果によって純水の漬け換えを繰り返し、浸漬水の塩素イオン濃度が低く一定となったことを確認して脱塩終了とした。

⑥脱水処理

次工程の合成樹脂含浸の前に、資料中に含まれる水分を完全に除去することが必要である。残留水分はさびを誘発するため、水分の除去は特に重要となる。資料内の水分を揮発性の高いエチルアルコールに置換するためエチルアルコールに資料を浸漬した。完全なる置換を図るため、再度新たなエチルアルコールに資料を浸漬した。

⑦合成樹脂含浸

資料の強化および外気との遮断のため、アクリル系合成樹脂（パラロイドNAD10）を資料に含浸した。パラロイドNAD10・ソルベントナフサ20%溶液に資料を浸漬し、減圧含浸したのち常圧含浸した。合成樹脂のコーティング効果を高めるため、乾燥後、再度同様の樹脂含浸を行った。

⑧接合・補填・補彩

接合には、エポキシ系接着剤（アラルダイトラピッド）を用いた。今回の資料については、補填・補彩箇所はなかった。

3. 報告書作成

処理後の資料写真を撮影し、作業過程および結果をとりまとめた報告書を作成した。なお、それぞれの資料の状態や処理工程については資料ごとの報告書を作成し末尾に添付した。

(2) 学会発表等

2017年度は、調査室の業務に関わる学会での研究発表等はなかったが、外部からの依頼を受けての講演等は実施している。その内容については、次章でまとめる。

(3) 科学研究費採択状況

2017年度において、当室の職員で科学研究費の代表として交付を受けたものはなかった。ただし、基盤研究（B）（研究課題番号16H03504）「古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究」（代表：菊地芳朗 福島大学）の分担者として、石橋が分担金260,000円（直接経費200,000円、間接経費60,000円）を配分されている。

7. 教育普及活動

(1) 非常勤講師

- ・菅野智則 東北大学大学院文学研究科・文学部 考古学特論・各論（後期）「先史文化の考古学」

(2) 授業等教育活動への協力

・東北大学総合学術博物館 博物館学実習VI「館園実習」

東北大学総合学術博物館が実施している実習（博物館学実習VI「館園実習」担当：総合学術博物館藤澤敦教授）の依頼を受けて、2017年9月19日に埋蔵文化財調査室にて実施した。当室における考古学資料の収蔵状況、保存処理に関する講義を行った。参加者は19名である。

・東北大学総合学術博物館 富沢団地における遺跡発掘調査

東北大学総合学術博物館から依頼を受け、学生の実習を兼ねた富沢団地内の芦ノ口遺跡の発掘調査（5月22日～6月8日）に協力した。

(3) 展示活動

・川内萩ホール展示ギャラリー常設展

この事業は、2011年度から継続的に実施しており、これまでの経緯は『年次報告2015』に記載してある。2016年度より、本学総務企画部広報課社会連携推進室編集・発行のまなび情報誌「まなぶひと」において広告を掲載している。また、川内萩ホールのホームページでも紹介されている（<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/hagihall/facility/gallery.html>）。

・企画展示「川内キャンパスのむかしむかし～仙台城跡二の丸～」

本学附属図書館エントランスロビー展示コーナーにて、川内南キャンパス出土遺物に関する企画展示「川内キャンパスのむかしむかし～仙台城跡二の丸～」を9月25日～11月26日に行った。本展示は、本学のホームカミングデーに合わせて実施した。展示会場は無人であるため正確な見学者数は不明であるが、設置しておいた目録の減少枚数からすると、最低220名程は見学したものと推定できる。

巡回展示として、同様の展示を2018年1月15日～2月9日に本学片平キャンパスの史料館にて実施した。同様に、最低70名程は見学したものと推定される。

なお、2018年3月末日から続編となる「川内キャンパスのむかしむかしII～仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区～」の展示を開催しているが、次年度の年次報告書にて報告したい。

(4) 講演講師・協力依頼等

・東北大学学術資源研究公開センター植物園「植物園の日」への協力

5月4日 東北大学学術資源研究公開センター植物園主催（協賛：日本植物園協会）のイベント「植物園の日」に協力し、「文化財からみる青葉山の歴史」と題したレクチャーと、青葉山内を巡検し、東北大学構内の文化財について解説を行った。参加者は66名であった。

・全国遺跡報告総覧平成29年度実務者会議

8月30日 全国遺跡報告総覧に関する実務者会議が、奈良文化財研究所平城宮跡資料館を会場として実施された。参加大学は、秋田大学・東北大学・筑波大学・富山大学・信州大学・滋賀大学・大阪大学・神戸大学・奈良女子大学・岡山大学・山口大学・香川大学・愛媛大学・高知大学・宮崎大学の15大学である。そのほか、事務局の島根大学と奈良文化財研究所担当者、システム作成を請け負っているENU Technologies社の担当者が参加した。当室からは菅野が参加した。

・宮城県立白石高等学校生 仙台城に関する解説

9月5日 東北大学附属図書館から依頼を受け、宮城県立白石高等学校生徒に「仙台城二の丸地区と武家屋敷」と題する解説を行った。

・青葉山・八木山フットパスの会 青葉山・川内キャンパスの文化財巡検

9月9日 青葉山・八木山フットパスの会から依頼を受け、「有史以前・以後の青葉山の住人を尋ねる」と題するレクチャーと共に、青葉山から川内まで徒歩で巡査し、東北大学構内の文化財に関する解説を行った。参加者は50名であった。

・仙台市博物館ボランティア三の丸会 川内南キャンパスの遺跡巡査

11月22日 仙台市博物館のボランティアにより構成される三の丸会から依頼を受け、仙台城跡二ノ丸地区に関するレクチャーと川内南キャンパスを巡って遺跡の解説を行った。そのほか、図書館で行っていた当室の企画展示、萩ホールの常設展示などについても解説した。参加者は20名程であった。

・奈良文化財研究所 報告書データベース作成に関する説明会

12月20日 奈良文化財研究所が主催する「報告書データベース作成に関する説明会」(ほかの共催: 東北大学大学院文学研究科、島根大学附属図書館、全国遺跡報告総覧プロジェクト。後援: 文化庁、全国埋蔵文化財法人連絡協議会、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会)を共催した。本会は、川内南キャンパスの文化系総合講義棟で開催され、「報告書データベースの今後と課題」と題した報告を行った。

・宮城県経済商工観光課 記録誌『伊達政宗公生誕450年』への作成協力

2018年2月8日に宮城県経済商工観光課より依頼を受け、記録誌『伊達政宗公生誕450年』に掲載する図書館で行った展示「川内キャンパスのむかしむかし～仙台城跡二の丸～」に関する原稿を送付した。この冊子は、宮城県のホームページ(<https://www.pref.miyagi.jp/site/date450/>)で公開されている。

・宮城県教育庁文化財保護課 遺跡発掘調査報告書の電子化に関する講師派遣依頼

2018年2月6日 宮城県教育庁文化財保護課から、平成29年度第2回宮城県市町村教育委員会文化財担当者会議にて、「発掘調査報告書登録方法及び電子化について」と題するレクチャーの依頼を受け、菅野が担当した。

(5) 保管資料の貸出

・芦ノ口遺跡出土資料の貸出

4月11日 文学研究科考古学研究室鹿又喜隆准教授より依頼を受け、大学院生による研究のため、4月11日～9月30日にかけて芦ノ口遺跡第1次調査等の資料貸出を行った。

(6) 外部からの派遣依頼等

当室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、下記のとおりである。

・担当者：菅野智則

①基盤研究（B）（研究課題番号26284100）「気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合的研究」代表：石川日出志（明治大学）研究協力者

9月2～3日 岩手県盛岡市岩手県民情報交流センター 古代貝塚・集落集成グループの合同会議

2018年3月10日 東京都千代田区明治大学 古代貝塚・集落集成グループの合同会議

②東北大学文学研究科東北文化研究室公開講演会「縄文時代の陸と海の道」主催：東北文化研究室 講師

11月11日 東北大学「東北地方における縄文時代のヒトとモノの動き」口頭発表

・担当者：石橋宏

①基盤研究（B）（研究課題番号16H03504）「古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究」代表：菊地芳朗（福島大学）

研究分担者

7月1日・2日 八戸市埋蔵文化財センター是川館 関連遺跡巡検と研究発表

2018年1月6・7日 福島大学行政政策学類考古学研究室 関連遺跡の巡検と今後の研究の進め方についての打ち合わせ、研究発表

②企画展「ひつぎのヒミツ－棺から読み解く古墳時代－」講演会 主催：山梨県立考古博物館 講師

11月5日 風土記の丘研修センター「東日本の古墳と石棺・陶棺」口頭発表

③国史跡「石の宝殿及び竜山石採石遺跡」指定記念連続講演会 主催：高砂市教育委員会 講師

11月11日 高砂市教育センター「竜山石製石棺秩序の形成とその影響関係」口頭発表

(7) その他の広報活動

・調査室ウェブサイト (<http://web.tohoku.ac.jp/maibun/>)

この事業は、2011年度から実施しており、これまでの経緯は『年次報告2015』に記載してある。本年度も継続的に更新し、当室発行のリーフレット「埋蔵文化財調査室だより」や、様々なイベントについて掲載している。

・全国遺跡報告総覧 (<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>) における発掘調査報告書の公開

この事業には、2010年度に本学附属図書館が参加し、当室も当初の年度より附属図書館に協力している。全国遺跡報告総覧には、当室の調査報告書・年次報告書等を継続してアップロードし公開している。また、2016年度からは、附属図書館から依頼を受け、当室が中心となって本事業を進めている。

・リーフレット「埋蔵文化財調査室だより」の作成・公開

当室の業務内容や構内遺跡をわかりやすく説明するため、昨年度は、川内南地区（仙台城跡二の丸地区）、川内北地区（仙台城跡北方武家屋敷地区）、青葉山地区（青葉山遺跡群）、富沢地区（芦ノ口遺跡）、埋蔵文化財調査室の業務内容（発掘調査と整理作業）、構内遺跡出土遺物（陶磁器）の紹介リーフレットを作成している。2017年度は、「遺物を後世に残す－保存処理－」を作成した。

8. 仙台城跡二の丸第18地点6B区出土の木簡（W1）の釁文訂正について

2017年に刊行した『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』6にて報告した仙台城跡二の丸第18地点6B区出土の木簡（遺物番号：W1）について、釁文の別の解釁が可能なことが判明した。そのため、ここで改めて報告することとする。釁文については、東北大学大学院文学研究科准教授籠橋俊光氏に読解して頂いた。なお、木簡W1の釁文以外は変更がないため、その他の調査成果の詳細は『調査報告』6を参照されたい。

訂正点は以下の通りである。

	訂正前	訂正後
木簡型式	022型式	011型式
裏面釁文	・「○右内」	・「○かハ内」

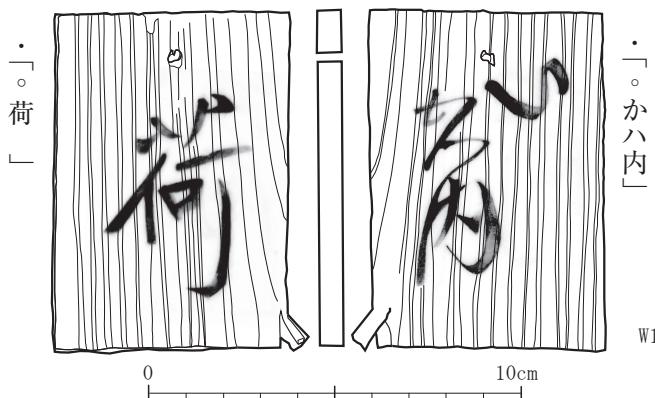


図10 二の丸第18地点（6B区）出土遺物
Pl.10 Various implements from NM18 (Area 6B)

仙台城跡二の丸第18地点の発掘調査は2013年と2014年の2回行われた。計10ヶ所の調査区を設定し、近世二の丸期の遺構確認の調査を行った。当調査地点は、近世は仙台城の二の丸に相当し、近代に入り、仙台鎮台を経て、陸軍第二師団司令部が置かれた場所である。

調査は、陸軍第二師団期と考えられる近代の土層（1層）、および明治15年の火災に伴う土層（1層下部）までを除去し、下層にある近世二の丸期の遺構の保存状態を確認することを方針としている。そのため、基本的には、二の丸期の遺構・層序は掘削しておらず、出土遺物も明治初頭や陸軍第二師団期のものが主体である。しかし、調査区によっては下層にある近世の遺物が、近代の層序にも一定程度含まれる場合がみられた。

木簡W1は、6B区の盛土層から出土している。盛土層は、現代の表土層および第二師団期以降の近現代の整地層をまとめた層である。『調査報告』6では、釁文は、表面を「荷」、裏面を「右内」とした。釁文の意味については、表面が「荷」の木簡のため、裏面の「右内」については人名や地名などの可能性を想定していたが、具体的な意味は不明であった。また、6B区は近現代の層である盛土層からも、近世の陶磁器などが比較的出土していることから、木簡の年代は、近世か、近代以降か判断することはできないと報告した。

この木簡について、木簡学会から2文字で他の釁文である可能性についてご指摘を受けた。そこで、改めて釁文を検討した結果、この「右内」としていた面について、「かハ内」と読解できる可能性が考えられた。明確に読める「内」の上にある文字について、当初は1文字と想定していたが、2文字の可能性を踏まえて再検討を行った結果、「かハ内」と読解することが最もふさわしいのではないかという結論に至った。

新たな釁文の「かハ内」については、出土地点は現在も仙台市青葉区川内という地名であり、出土地点の地名を表しているものと考えられる。出土地点を「川内（かわうち）」と呼ぶようになるのは、近代以降、仙台鎮台・陸軍第二師団が置かれてからと考えられる。仙台城跡二の丸地区第12地点（NM12：『年報』11）からは、「仙台

表5 二の丸第18地点出木簡観察表
Tab5. Notes on wooden tablets from NM18

登録番号	種類	区	出土場所	法量	調整・特徴	図	図版
W1	木簡	6B	盛土等	長さ9.0cm 幅6.2cm 厚さ0.7cm	木簡011型式 ・「○荷」 ・「○かハ内」	45	35

河内輜重隊第三大隊第一中隊ノ四」と書かれた荷札木簡が出土しており、表記は異なるが「かわうち」と呼んでいたことは確実である。

近世で二の丸を「かわうち」と称して荷を送る可能性があったかについては、以下のように考察する。各種の絵図では表記の違いはあるが「御二之丸」、「御二丸」、「御二ノ丸」と記載されている。さまざまな文書でも、「御二之丸」やそれぞれの部屋名や組織名で呼ばれており、城内を「かわうち」と呼ぶことは一般的ではなかったと考えられる。ただし、御城勤めの心得を書いた『初鏡心之手綱』（仙台市史編さん委員会2006）にて、「川内御米蔵」という表現が確認された。この「川内御米蔵」が指す場所としては、併記されている「原ノ町御米蔵」、「若林御米蔵」などから考えて、三の丸にある御米蔵を示していると考えられる。三の丸御米蔵は、出土地点である二の丸第18地点からは、段丘を一段下った西南方向にあり、大手門より外に出るため、W1の木簡が示す「かハ内」の場所としては、直接的には考えにくい。三の丸以外の御米蔵では、二の丸御台所門西側に「御挽屋御米蔵」が確認される。出土地点からは近い場所ではあるが、仮に木簡W1の「荷」の宛先とするならば、「御挽屋」という部屋名なしに宛先を「かハ内」とするのは難しいのではないかと考えられる。

仙台城跡北方武家屋敷地区第7地点（BK7：『年報』19第3分冊）から享保年間の木簡が大量に出土しており、木簡の記載内容から二の丸に宛てた品に付けられていた荷札が中心で、二の丸から廃棄されたものであることが判明している。二の丸宛ての記載内容では、「御用」、「御大所」、「仙臺大所」、「仙臺勝手」のような二の丸内の部屋名・組織名を記し、併せて所属する人名を記す場合が確認されている。他に変わるものがない人物では「姫君様」、「千五郎様」のように御名だけを記す例もある。しかし、これらの木簡の中には、「川内／河内（かわうち）」という表現は、今のところ確認されておらず、二の丸城内の宛名として、「かわうち」という呼び方は通常しない可能性が高いことが出土例からも考えられる。

以上のこと踏まえて、W1の「荷」、「かハ内」の木簡は、出土層位と記載内容の解釈から、近代以降の仙台鎮台・陸軍第二師団期のものである可能性が高いと考えられる。

〈引用・参考文献〉

- 大道篤史ほか 1998 『房の沢IV遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 仙台市教育局生涯学習部文化財課 2005 『仙台城跡整備基本計画』
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史』 特別編7城館 仙台市
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 9
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 11
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001a 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 15
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001b 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 16
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 19 第3分冊
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2012 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』 2011
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2016a 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』 2015
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2016b 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区16地点』
- 東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 5
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2017a 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』 2016
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2017b 『仙台城跡二の丸地区第18地点』 東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 6

直接引用したもののみを掲載した。

IV. 資料

1. 国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成6年5月17日 規第56号

(趣旨)

第1条 この規程は、東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(目的)

第2条 調査室は、東北大学（以下「本学」という。）の学内共同教育研究施設等として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

(職及び職員)

第3条 調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

(室長)

第4条 室長は、調査室の業務を掌理する。

2 室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

3 室長の選考は、第6条に規定する運営委員会の議を経て、総長が行う。

4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(文化財調査員)

第5条 文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

2 文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

(運営委員会)

第6条 調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

(運営委員会の組織)

第7条 運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一 キャンパス総合計画委員会の委員 若干人

二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人

三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四 施設部長

(委員長)

第8条 委員長は、室長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会の会務を総理する。

3 委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(調査部会)

第9条 運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

(調査部会の組織)

第10条 調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 調査室の特任准教授
- 二 文化財調査員
- 三 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 四 施設部計画課長
- 五 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(部会長)

第11条 部会長は、室長をもって充てる。

2 部会長は、調査部会の会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

(任期)

第13条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(幹事)

第14条 運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

(事務)

第15条 調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(雑則)

第16条 この規程に定めるものほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成6年5月17日から施行する。
- 2 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。
- 3 東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

附 則（平成16年4月1日規第207号改正）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成18年4月26日規第80号改正）

- 1 この規程は、平成18年4月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年4月1日から適用する。
- 2 平成18年4月1日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第4条第3項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成18年5月16日までとする。

附 則（平成19年4月1日規第76号改正）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成25年4月23日規第56号改正）

この規程は、平成25年4月23日から施行し、改正後の第7条第1号の規定は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成27年3月23日規第18号改正）

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成29年3月28日規第64号改正）

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

2. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2017年度）

委員長 室 長（学術資源研究公開センター 教授）	藤澤 敦
委員 キャンパス総合計画委員会（川内キャンパス環境整備協議会 国際文化研究科長）	小野 尚之
キャンパス総合計画委員会（青葉山キャンパス環境整備協議会 理学研究科長）	寺田 真浩
キャンパス総合計画委員会（キャンパスデザイン室 特任教授）	杉山 丞
学術資源研究公開センター 准教授	高嶋 礼詩
文学研究科 教授	阿子島 香
文学研究科 教授	柳原 敏昭
文学研究科 准教授	鹿又 喜隆
文学研究科 准教授	堀 裕
工学研究科 准教授	飛ヶ谷 潤一郎
災害科学国際研究所 准教授	佐藤 大介
施設部 長	高橋 勝治
幹事 施設部 計画課長	森井 敦也

3. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2017年度）

委員長 室 長（学術資源研究公開センター 教授）	藤澤 敦
委員 学術資源研究公開センター 准教授	高嶋 礼詩
文学研究科 教授	阿子島 香
文学研究科 教授	柳原 敏昭
文学研究科 准教授	鹿又 喜隆
文学研究科 准教授	堀 裕
工学研究科 准教授	飛ヶ谷 潤一郎
災害科学国際研究所 准教授	佐藤 大介
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（特任准教授）	菅野 智則
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	柴田 恵子
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	石橋 宏
施設部 計画課長	森井 敦也

4. 東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報1	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第1地点 (NM1)	
		仙台城跡二の丸第2地点 (NM2)	
		仙台城跡二の丸第3地点 (NM3)	
東北大学埋蔵文化財調査年報2	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山B遺跡第1次調査 (AOB1)	
		青葉山B遺跡第2次調査 (AOB2・旧称AOF)	
		青葉山E遺跡第1次調査 (AOE1)	
東北大学埋蔵文化財調査年報3	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第6地点 (NM6)	
		芦ノ口遺跡第1次調査 (TM1)	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査 (TK)	
東北大学埋蔵文化財調査年報4・5	1992	研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和61年度（1986年度）事業概要	
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第4地点 (NM4)	
		仙台城跡二の丸第7地点 (NM7)	
東北大学埋蔵文化財調査年報6	1993	仙台城跡二の丸第8地点 (NM8)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和63年度（1988年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報7	1994	仙台城跡二の丸第5地点 (NM5)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		平成1年度（1989年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第5地点 (NM5) 付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第5地点 (NM5) 調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第5地点 (BK5)	
東北大学埋蔵文化財調査年報8	1997	川渡農場町西遺跡第1地点 (KW1)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		平成2年度（1990年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第9地点 (NM9)	
東北大学埋蔵文化財調査年報9	1998	平成3年度（1991年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点 (NM10)	
		芦ノ口遺跡第2次・3次調査 (TM2・TM3)	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成4年度（1992年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点 (NM13)	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成5年度（1993年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点 (NM12)	
		仙台城跡二の丸第14地点 (NM14)	
		青葉山E遺跡第2次調査 (AOE2)	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成6年度（1994年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点 (NM15)	
		青葉山E遺跡第3次調査 (AOE3)	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成7年度（1995年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点 (NM11)	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点 (BK4)	
		青葉山E遺跡第4次調査 (AOE4)	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成8年度（1996年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第6地点 (BK6)	
		青葉山E遺跡第5次調査 (AOE5)	
		芦ノ口遺跡第4次調査 (TM4)	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成9年度（1997年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点 (NM16)	
		青葉山E遺跡第6次調査 (AOE6)	

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報17		研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第1分冊		仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	平成13年度（2001年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 木簡・墨書きある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点（BK8） 青葉山E遺跡第7次調査（AOE7） 青葉山E遺跡第8次調査（AOE8）	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報21		平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9） 芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）	
東北大学埋蔵文化財調査年報22		平成16年度（2004年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報23		平成17年度（2005年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10） 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大学埋蔵文化財調査室

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12） 川内地区の絵図記載人名の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大学 埋蔵文化財調査室
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	
			芦ノ口遺跡第7次調査・第8次調査	
			芦ノ口遺跡第7次調査（TM7）・第8次調査（TM8）	
			芦ノ口遺跡第9次調査・青葉山E遺跡第9次調査（AOE9）	
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告2	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告3	芦ノ口遺跡第7次調査・第8次調査	2014	芦ノ口遺跡第7次調査（TM7）・第8次調査（TM8）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告4	芦ノ口遺跡第9次調査・青葉山E遺跡第9次調査－東日本大震災復旧事業関係調査報告書－	2015	芦ノ口遺跡第9次調査（TM9）・青葉山E遺跡第9次調査（AOE9）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告5	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点	2016	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告6	仙台城跡二の丸地区第18地点	2017	仙台城跡二の丸地区第18地点（NM18）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告7	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第14地点 第1分冊	2019	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）	東北大学 埋蔵文化財調査室

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012	2014	平成24年度（2012年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013	2015	平成25年度（2013年度）事業概要 芦ノ口遺跡第10次調査（TM10）	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2014	2016	平成26年度（2014年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2015	2017	平成27年度（2015年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2016	2018	平成27年度（2016年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2017	2019	平成28年度（2017年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

*これらの刊行物は、東北大学機関リポジトリTOURおよび全国遺跡報告総覧で全て公開している。

東北大学機関リポジトリTOUR <https://tohoku.repo.nii.ac.jp>

全国遺跡報告総覧 <http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2017

平成31年3月29日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24
TEL 022 (263) 1166
